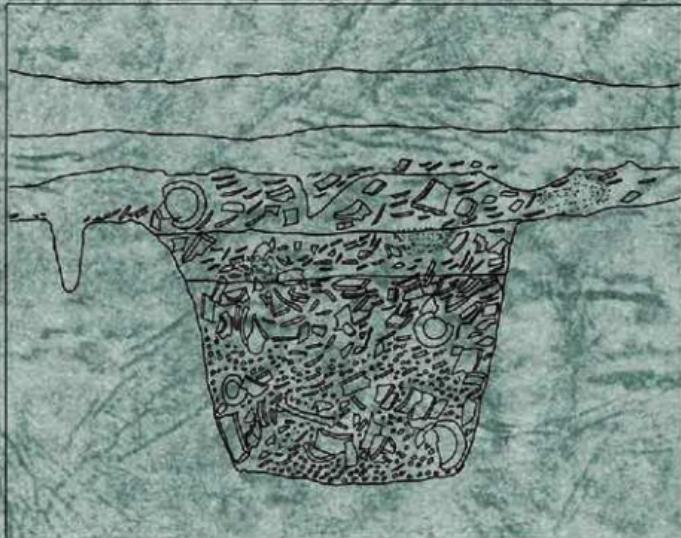


有明町文化財報告書第10集

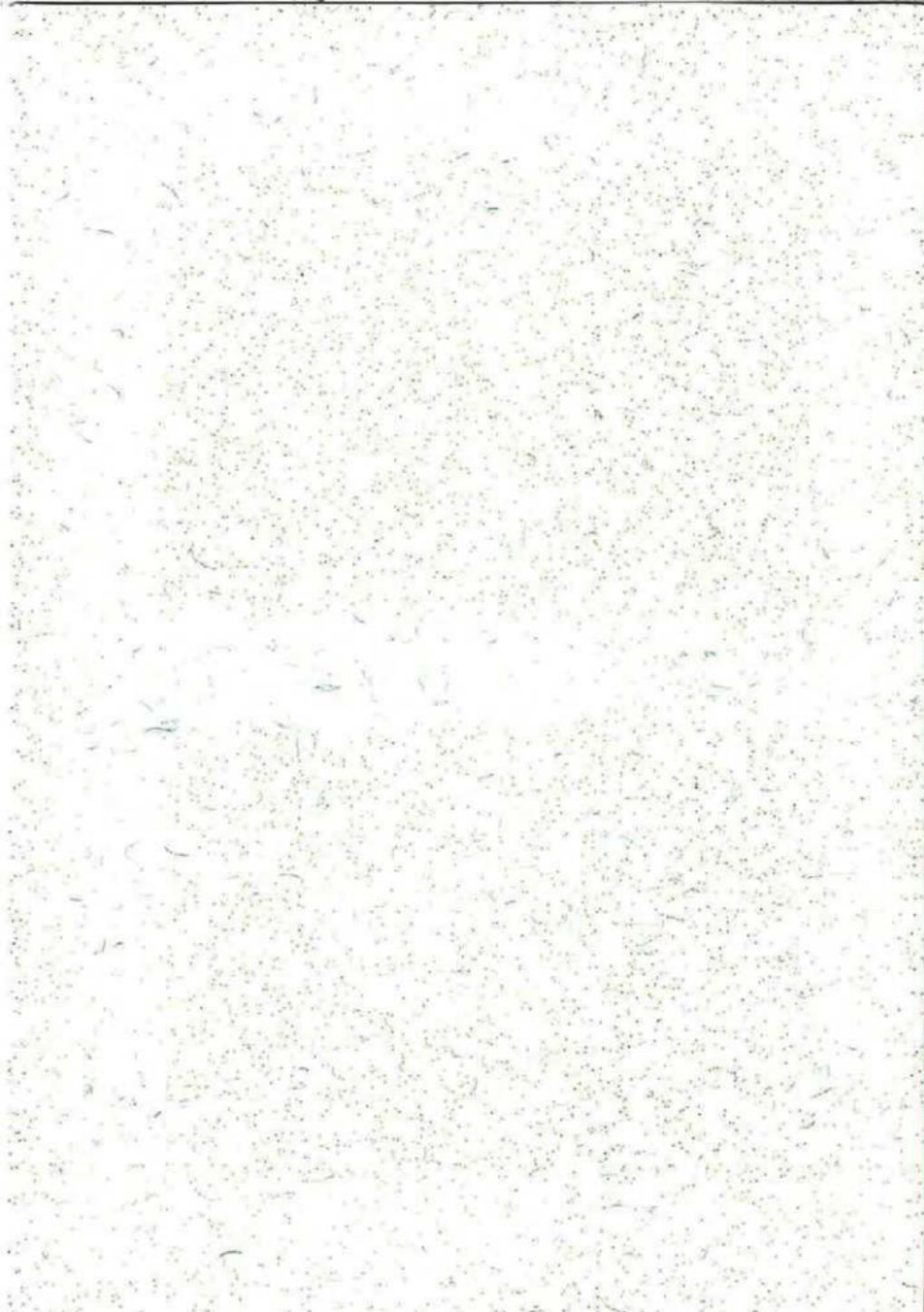
概要報告書

大野原七反畠遺跡



1993年5月

長崎県有明町教育委員会



概要報告書

大野原七反畠遺跡

長崎県有明町教育委員会



調査地

遺跡地周辺、上空から



七反畠遺跡出土品の中から



废棄壤上层部断面



废棄壤下层部断面



B 扩张区遗构



堤坝遗构

序 文

教育長 吉 田 忠 孝

有明町大野原は縄文晩期から弥生期の遺跡といわれ、昭和30年代農業作業や、道路工事等の折たくさん土器や壺棺が出土して、話題になっていました。

本格的な調査をいたしましたのは、町制施行30周年記念事業として、町史が編さんされることになり。その一環として古田正隆、諫見富士郎両先生による、昭和59年、60年に行なわれた調査でした。

その結果弥生時代の壺棺をはじめ、土壙墓などの遺物や遺構が数多く出土し、当時の社会を知るうえで、大切な手がかりを提供してくれました。

平成3年、有明町民プールをこの地に建設することになり、その用地の試掘を諫見富士郎先生にお願いしました。ところが今回の調査では奈良時代の生活文化を表現する、土器、祭祀跡とおぼしい遺構などを見つかり、九州は勿論日本でも数少ない貴重な遺跡であることが実証されました。

私たちは、諫見先生のご苦労に深甚の感謝を申しあげ、出土品はながく大切に保存していきたいと思っております。

例　　言

1. 本書は、長崎県南高来都有明町教育委員会が実施した、同町大野原七反畠遺跡の範囲確認発掘調査の概要報告書である。調査は平成3年（1990）3月4日から、4月13日まで行なった。
2. 調査の目的は、調査地に町施設のプール建設が予定されており、建設工事に先立って予定地が大野原遺跡地であることから、その範囲確認を行なうものであった。
3. 調査は有明町教育委員会が主体となり、委嘱をうけた詠見富士郎が調査を担当し、本書の作成についても担当者が執筆、編集にあたった。
4. 出土品中、貝類の分類・学名表示については山本愛三先生に依頼し協力をたまわった。
5. 出土品の整理・実測などで、伊藤賢三郎氏の助力を得た。
6. 調査段階で次の諸氏から指導、助言をたまわった。また島原高等学校郷土部の協力を得た。

吉田安弘（地方史研究家・現代詩人会々員） 久原巻二（高原高等学校郷土部顧問） 秀島貞康（諫早市教育委員会文化課） 古賀力（諫早市教育委員会文化課）
7. 調査関係者の構成については、「調査の経緯」の項にかかげる。

本文目次

序

I. 調査に至る経緯と調査の経過 1

II. 道路の立地と歴史環境 5

III. 調査

1. 調査の概要 8

2. 調査区の土層 10

3. 造構 13

4. 遺物と出土状況 17

IV. 遺物

(1) A 拡張区の遺物 23

(2) B 拡張区の遺物 26

V. むすび

1. 七反畳道路の概観 47

2. 時代区分と編年 47

3. 遺跡の規模と広がり 48

4. 廢棄場と祭祀 49

5. 炉状造構 50

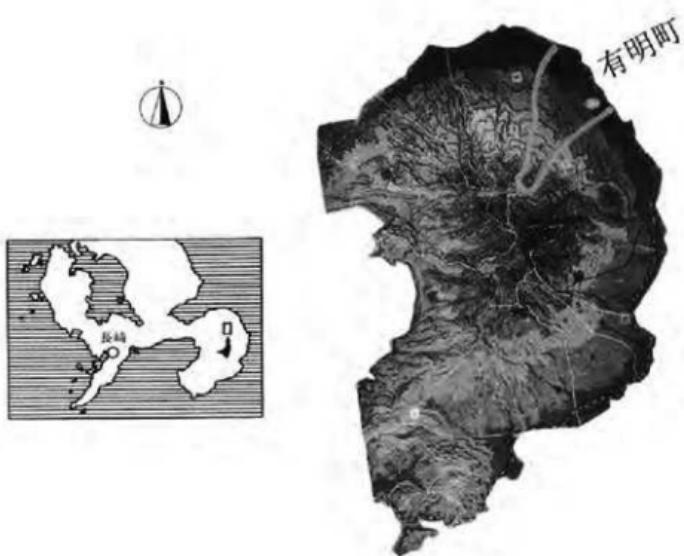
挿 図 目 次

第1図 有明町位置図.....	1
第2図 遺跡分布図.....	6
第3図 遺跡周辺図.....	8
第4図 調査敷の配置図.....	9
第5図 ポーリング地層柱状図.....	11
第6図 ポーリング位置と調査区.....	11
第7図 調査区土層柱状図.....	11
第8図 土層図.....	12
第9図 Aトレンチ遺構実測図.....	13
第10図 B-4拡張図.....	14
第11図 麻糬窓実測図.....	14
第12図 B-4拡張区遺構図.....	15
第13図 A4拡張区の出土状況断面図.....	18
第14図 遺物出土状況断面図.....	19
第15図 B4拡張区遺物出土状況.....	21
第16図 A拡張区出土土器実測図.....	24
第17図 A拡張区出土土器実測図.....	25
第18図 B拡張区出土土器須恵器実測図(1).....	27
第19図 B拡張区出土土器須恵器実測図(2).....	28
第20図 B拡張区出土土器須恵器実測図(3).....	29
第21図 B拡張区出土土器須恵器実測図(4).....	31
第22図 B拡張区出土土器須恵器実測図(5).....	32
第23図 B拡張区出土土器須恵器実測図(6).....	33
第24図 B拡張区出土土器須恵器実測図(7).....	34
第25図 B拡張区出土土器須恵器実測図(8).....	35
第26図 B拡張区出土土器須恵器実測図(9).....	36
第27図 B拡張区出土土器須恵器実測図(10).....	37
第28図 B拡張区出土土器須恵器実測図(11).....	38
第29図 B拡張区出土土器鉢型土器実測図.....	39
第30図 B拡張区出土土器高杯・盤・鉢実測図.....	40
第31図 B拡張区出土土器碗・蓋実測図.....	41
第32図 B拡張区出土土器皿・甕実測図.....	42
第33図 B拡張区出土鐵器実測図.....	42
第34図 円面硯部実測図.....	43
第35図 B拡張区出土石器実測図.....	44
第36図 大型須恵器叩き痕(1).....	45
第37図 大型須恵器叩き痕(2).....	46
第38図 一丁畠採集土器実測図.....	48

図板目次

写真図版1.	調査風景	51
写真図版2.	A・B拡張区出土状況	52
写真図版3.	A・B拡張区出土状況	53
写真図版4.	B拡張区出土状況	54
写真図版5.	B拡張区出土状況	55
写真図版6.	A拡張区出土遺物	56
写真図版7.	B拡張区出土須恵器壺・鉢	57
写真図版8.	B拡張区出土須恵器杯蓋（1）	58
写真図版9.	B拡張区出土須恵器杯蓋（2）	59
写真図版10.	B拡張区出土須恵器杯蓋（3）	60
写真図版11.	B拡張区出土須恵器杯（1）	61
写真図版12.	B拡張区出土須恵器杯（2）	62
写真図版13.	B拡張区出土須恵器杯（3）	63
写真図版14.	B拡張区出土須恵器杯（4）	64
写真図版15.	B拡張区出土須恵器皿	65
写真図版16.	B拡張区出土須恵器皿・土師器壺（1）	66
写真図版17.	B拡張区出土土師器壺（2）	67
写真図版18.	B拡張区出土土師器壺（3）	68
写真図版19.	B拡張区出土土師器壺（4）	69
写真図版20.	B拡張区出土土師器壺・瓶型土器	70
写真図版21.	B拡張区出土土師器壺・高杯・他	71
写真図版22.	B拡張区出土土師器壺鉢	72
写真図版23.	B拡張区出土土師器壺蓋・皿・他	73
写真図版24.	B拡張区出土土師器壺鉄器・鐵蘇・石器	74
写真図版25.	廢棄壇出土鹿骨・他	75

第1図



第1図 有明町位置図

I. 調査に至る経緯と調査の経過

調査に至る経緯

調査地の位置

調査地は、長崎県南高来郡有明町大三東鶏木名字七反畠にある。遺跡地図では大野原遺跡の範囲に含まれ、そのもっとも東南端部に位置している。調査地を含む大野原遺跡台地は、高原半島中央部に達なる雲仙諸峰のなかの、有明町に属する舞岳の山麓に立地し、ゆるやかに傾斜する裾野の末端低台地、標高20m～30mにある。

ここに形成される集落の中心部にもあたり、風土記に大野浜は北方300mの至近距離にある。

大野原遺跡の規模は町内で確認されている遺跡のなかでも最大で、約20数ヘクタールにもおよび、周辺散布地を含めるとその倍化する。

遺跡の概要

大野原遺跡は、早くから弥生時代の土器片、石器など遺物の散布地として知られていた。この地方は牛蒡の特産地で、収穫時の深耕により大量の埋蔵遺物が毎年地表に堀り出され、畠道などに捨てられてきていた。

昭和43年（1968），遺跡の一角で、牛蒡収穫時に大型合口壺棺が耕作者により掘り出され、こわされて埋もだされたが、それを知った永松実氏（当時国見高校生徒、現在長崎市教育委員会文化課勤務）のすすめで、翌年（昭44年）に島原在住の古田正隆氏（註1）の指導を得て国見高等学校社会科学研究部が発掘調査を実施した。この調査で、合口壺棺出土地点周辺部から、土壙墓3基、支石墓状の巨石塗土壙墓1基を検出したが、同葬遺物鉢形土器より弥生時代前期末から中期にかけての埋葬遺跡地であることが明らかとなつた。（註2）

さらに昭和59年～60年（1984～85）に、有明町教育委員会が町史編纂事業の一環として、昭和44年調査地点周辺の発掘調査を行ない、合口壺棺墓3基、土壙墓数基が出土した。壺棺は桜馬場Ⅲ式ならびにⅣ式に共通し、共伴する土器片が城ノ越土器に比定されることから、遺跡は弥生時代中期を中心とする埋葬遺跡地であることを確認した。（註3）

調査の経過

平成3年（1991）に、有明町で町営のプール建設が計画され、調査地が建設予定地になった。この予定地はプール建設のため町が買収した町有地で面積は約4千平方mである。予定地が大野原遺跡の境界線上にかかることから、建設工事に先立ち緊急に範囲確認調査を実施することになったものである。

プール建設は、秋に行なわれる島原半島の都市中体連水泳競技に使用できるよう年度内着工が望まれており、調査期間の設定に困難も生じた。

協議の結果、調査は平成3年3月4日から約20日間を目途に実施することが決まった。

範囲確認調査は、建設予定地のうち、基礎工事をともない、直接的に遺跡破壊につながるプール建設部分約2千m²と、取付道路にかかる削土部分50m²を対象とした。

調査対象地の現状は茶園であるが、もと牛蒡畠であったため、この地方の実情から、収穫時の天返しによる深耕のため、造構の損傷、破壊は避けがたいものと予見された。調査期間の設定にもそれは判断資料の一つとなっていた。

調査の過程で、A・Bの両地点で、良好な遺物と包含層が発見され、試掘 sondage を拡張し、その追跡を行なったが、調査期限内の調査終了に困難が生

じ、調査日程の変更を余儀なくされた。そのため年度内工事着工を変更、調査を続行することとなり、4月13日に調査は終了した。

3月29日、調査中に突然雲仙普賢岳に噴煙があがり、マグマの噴出がはじまったが、発掘調査が終わり出土品整理中に土石流が発生し、有明町を含め島原方面の災害は深刻化した。

遺物保管・整理場所の町民センターは救援のための県警機動隊の宿舎となり、緊迫した雰囲気のなかで整理作業はすすめられた。

有明町教育委員会は、年度始の多忙さと災害対策、危険区域児童の学校受入れなど緊急事態のもとで忙殺の日々が続いた。そのなかでも、出土遺物の保全・整理には最後まで尽力と援助をたまわった。教育長吉田忠孝氏はじめ職員各位の配慮に感謝を申し上げたい。

また調査にあたって、調査地の茶木の伐採と整地、遺構の実測など、教育次長宮川武利氏はじめ全職員の縦がかり的協力を得て調査の進行は助けられた。

註1. 古田正隆氏は国見高校社研部の特別顧問として部の育成指導にもあたらされた。島原南高地区的文化財保存、学術調査研究に力を尽されたが、いま神戸市に在住される。

註2. 古田正隆「有明町大野原の研究—長崎県有明町境の松—」、国見高等学校社研部報（昭44）

註3. 古田正隆、諫見富士郎、吉田安弘「大野原遺跡調査概報」、有明町埋蔵文化財報告第2報、第3報（昭59・昭60）



調査風景



調査最終段階で普賢岳が突然噴煙を上げた。（3月29日）

調査関係者の構成 大野原七反畠遺跡の調査関係者は次の方々である。（敬称略）
有明町教育委員会

教育長 吉田 忠孝
次長 宮川 武利・前田 久治（4月の人事異動で宮川次長は
職員 森光 順之 住民課長に昇進され前田次
宇土 清 長がその後を引き継がれ
中村 泽司 た。）
松本 直喜
松本 植一
金子加代子
出田 文子
有明町建設課 宇土 清富

協力者 島原高等学校郷土部
調査作業に従事下さった方々

吉田 順治 林田ハナヨ
吉田 松美 菅 力男
宮崎キヌエ 伊藤賢三郎
松本 キヲ 宮崎 佐十
森川キミヨ 久保 五郎
菅 フクエ 菅 マキヲ
織田トミコ 松本 政彦

現場作業にあたっては作業の統括、出土品の現場管理など、調査進行面で吉田順治氏の貢献は大きかった。感謝申しあげたい。

調査関係者の写真は最後の頁に掲載する。

II. 遺跡の立地と歴史環境

遺跡の立地

調査地である大野原七反畑遺跡は、長崎県南高来郡有明町大野原に所在し、大野原台地と東空開台地間の狭谷を流れ、かつて藩政時代両村の境界を示した境之松川に東接する30m台地にある。大野原遺跡に包含され、その東南端部にあたる。有明町役場、町民センターの東南方向に位置しており、いずれも目暮の近距離にある。大三東の中心部にもあたる。

有明町は昭和30年（1955）に大三東村、湯江村の合併でできた戦後の町である。旧藩時代には町内に、三之沢村・東空開村・大野村・湯江村の4村名がある。明治の市町村制施行で三之沢・東空開・大野の三村が統合され、大三東村になった経緯がある。

遺跡はこの旧藩時の大野村の中心部に所在し、台地に広がる大野原遺跡地の一角を占めている。小字名七反畑であるが、古代の条理制との関係も推測される。隣接する上方台地は一丁畠の地名がある。いずれも散布地である。

前項「調査地の位置」でふれたが、雲仙普賢岳の北に位置する舞岳（730m）から、有明海に向けてゆるやかに扇状台地が広がるが、その端部10m～30m台地は大三東ローム層上に厚い黒褐色の火山灰が堆積する。この肥沃な土壌は、原始から現代にいたる人類の文化層を豊かに形成する。

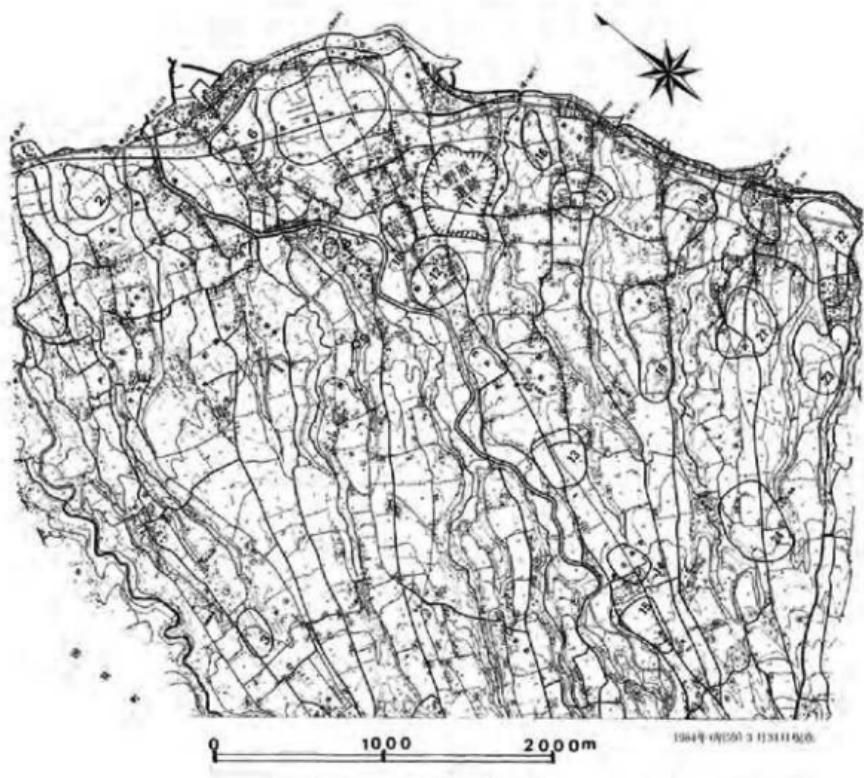
歴史環境

有明町には散布地を含め、遺跡台帳に昭和59年（1984）で25箇所の遺跡地をあげている。古田正隆氏は踏査結果をふまえ44箇所を遺跡地としている。この地方は遺跡が多い。気候・風土・産物に恵まれる立地条件は時代を超えて生活跡を複合させている。

発見されている遺跡では、縄文時代が全体の40%を占め、三万田・御領式文化を主体とする後期の遺跡が多い。代表的な遺跡に小原下遺跡（註1）中田遺跡（註2）などがある。弥生時代の遺跡は12%であるが、大野原遺跡を中心とした台地に広範に広がり、島原市三会景章園遺跡に連動する。そのなかに一野遺跡（註3）がある。

古墳時代の遺跡は全体の23%を占めるが、一野古墳、平山古墳以外に実態をともなうものは少ない。古墳の跡をとどめる地名や痕跡・伝えは多いが、消滅している。昭和59年～60年の有明町史編纂事業のなかで、古田正隆・吉田安弘氏らの調査で、六人道横穴古墳をはじめ町内に数基の横穴古墳の存在が確認されたが、対岸文化圏との交流、関係を知るうえでも画期的な発

有明町遺跡地図



1964年3月31日現在

番号	名 称	性 别	時 代
1	芦田山遺跡群	男 女	新石器・古
2	前崎山遺跡群	半山城 中・古	
3	清水山遺跡群	斎石城	新石器
4	森内遺跡	+	+
5	一ノ石遺跡	+	+
6	神社遺跡群	+	新・古
7	中田遺跡群	+	縄文
8	大曾根遺跡群	半山城 中・古	
9	平山古墳	古墳(円墳)	古 現
10	大野遺跡群	半山城 中・古	
11	太野遺跡群	斎石城	新石器・古
12	阿木遺跡群	+	古
13	佐久野遺跡群	+	古
14	下越原野遺跡群	+	縄文
15	上原原野遺跡群	+	+
16	東京御陵跡	半山城	中 古
17	才木遺跡群	斎石城	縄文
18	小原下遺跡	+	+
19	小原上遺跡	+	+
20	船尾遺跡群	斎石城	古・新石
21	山ノ内遺跡群	斎石城	+
22	一野遺跡群	+	新・古
23	七一遺跡群	+	縄文
24	猪八木保遺跡	+	+
25	櫛石原遺跡群	+	+
26			

第2図 遺跡分布図

見といえる。(註4)

歴史時代の道路はほとんど知られていないし、調査研究の事例も少ない。散布地域として注目されるものに一丁畠、甘木遺跡(註5)があるが、発掘調査で確認された事例に、県教委文化課が実施した町民センター内の青年の家・婦人の家建設に伴なう範囲確認調査がある。(註6)

また同じく県文化課調査の松尾遺跡でその事例があげられている。

今調査地である七反畠遺跡は、出土する多量の須恵器・土師器から、奈良時代の生活址と判断される。さきに事例にかかげた一丁畠遺跡・甘木遺跡・青年の家・婦人の家調査地点とは隣接し、同一遺跡圏と見なしてもよい。

註1. 「小原下遺跡報告(第一次発掘調査)」古田正隆、昭和42年国見高校社研部報

「製鉄遺構を伴なった小原下遺跡調査報告」古田正隆、1979年・百人委員会刊

「小原下遺跡」長崎県教育委員会、長崎県文化財調査報告書第67集1984年

註2. 「南高来郡有明町大三東中田遺跡の報告」古田正隆、島原高等学校郷土部報・昭和33年

「中田遺跡図録—傳統式の単純遺跡—」古田正隆、百人委員会埋蔵文化財報告第八集、1977年

「宅地造成に伴なう中田遺跡調査概報」古田正隆、有明町文化財報告第一集、昭和59年

註3. 「一野遺跡(南高来郡有明町)」古田正隆、有明町教育委員会1964年

註4. 「有明町史－先史古代編」有明町刊、昭和62年

註5. 「有明町史－先史古代編」

註6. 「大野原遺跡範囲確認調査の結果について」、宮崎貴夫・他有明町教育委員会報、平成元年

III. 調査

1. 調査の概要

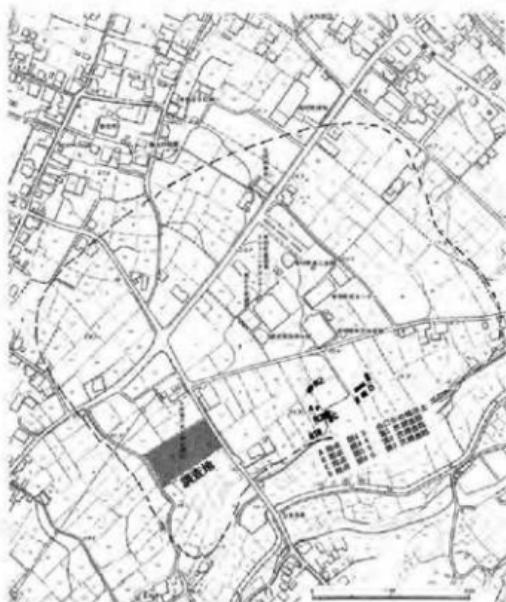
遺跡の地形と現況

七反塙遺跡の調査対象の面積は4100m²で長方形の畠地である。地番は10-3, 12-3の二筆から成るが境界は設けていない。ほぼ平坦地で、旧地形は北東両面に傾斜し、削平されたものと考えられる。東西の隣接地とはそれぞれ約1mの段差をついている。

遺跡から東へ約100mで境の松川が峡谷を流れるが、河川までは畠地が急段差を設けて続く。遺跡の北面は町道に接しており、町道は境の松川に向けて切通し、急勾配の坂をつくり盲目落橋に通じる。東空間に通じる旧脇街道で交通量も多いが、かって「盲落し」とよばれ通行の難所といわれた。

遺跡の標高は30mで大野原遺跡の最上段の位置にある。有明海をへだてて対岸大牟田・長州などはっきりと遠望できる。

現状は荒れた茶畠である。15年程前に牛蒡畠から茶園に転作したといわれている。



第3図 遺跡周辺図

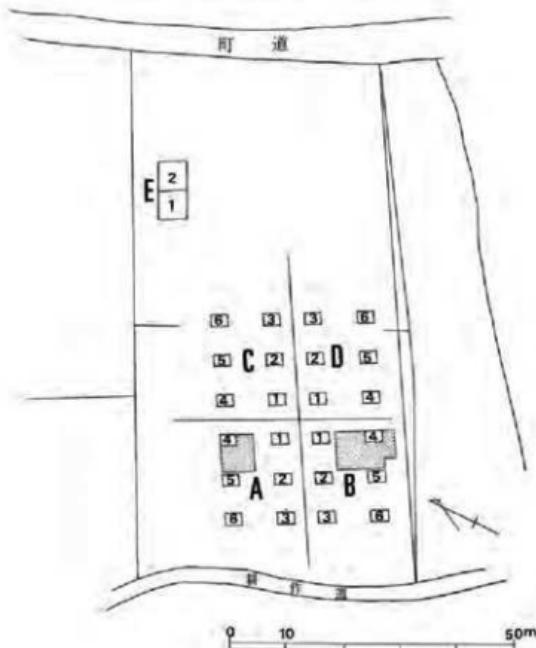
調査域の設定

調査域の設定については次の諸点を考慮、最少必要限の調査を目標にした。(1)基礎工事を伴ない、包含層を破壊する地点、(2)遺跡の規模範囲を効果的に把握できること、(3)必要に応じ調査域を拡張できること。

この目標にそって、プール建設予定地の南半、約2000m²と、削土を伴なう取付道路部分約50m²を調査対象区とした。駐車場に予定される北半の約2000m²は対象から除外した。

調査区の南半部分については、旧地形の傾斜と牛蒡生産による遺跡破壊の度合を考察し、境の松川寄りに中軸線を設け、中央部で中心線を交えさせA・B・C・Dの4区を設けた。

さらにブロックごとに、軸線が交える中心点から外側に向けて、1・2・3・4・5・6の記号を付し、合計26のトレンチを設定した。トレンチの単位面積は3m×2mとした。取付道路部分については、非調査区の状況把握を考え、5m×5mを2箇所継続して設け、E区とした。レベルは標高30mとした。調査面積は約120m²である。



第4図 調査域の配置図

2. 調査区の土層

土層と遺跡環境

有明町の雲仙山麓低台地には、舞岳火山の泥流が堆積したといわれる大三東ローム層が島原半島北部中央地帯を中心に広がる。その上層には厚い黒褐色の火山灰が層位をなして堆積する。大野原遺跡・小原下遺跡・国見町篠原遺跡（註1）を成立させる丘陵部は、とりわけ黒土層の堆積が深く、農耕地としての評価が高い。

大野原台地一帯は牛蒡の特産地を形成するが、反面収穫時の土層の掘り返しによる遺跡破壊も進行している。機械化がすすみ、収穫はトレンドイガ（土層掘削機）で巾約20cm・深さ約1mの土を切り割き、ベルトで外に噴出させて遺物も地上に散乱する。毎年収穫時に繰り返されるため、遺跡の破壊は漸減的にすんでいる。

調査地は、15年前に茶畑に転作したもの。それ以前は牛蒡生産地であったため、その傷跡を残している。

層序

大野原遺跡の土層は、位置によって若干の変化はあるものの基本的層序は共通する。それは次の通りである。

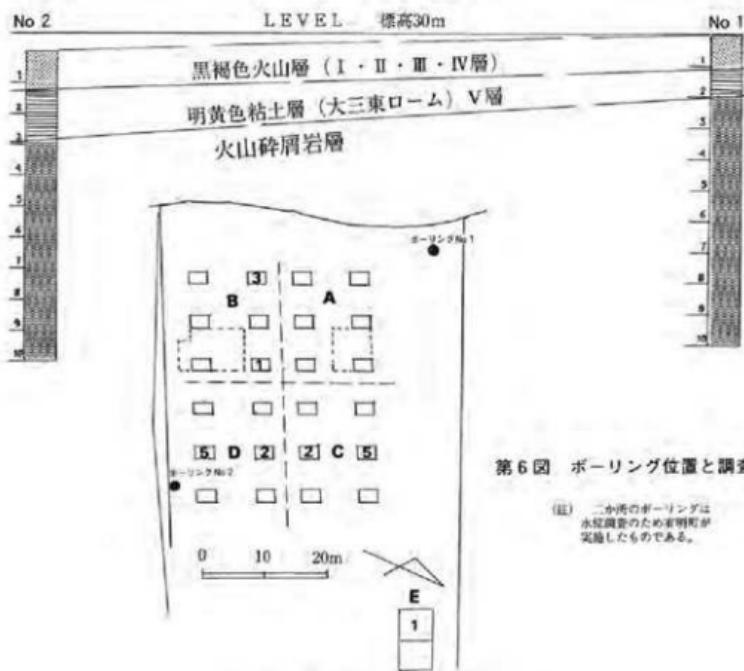
基本層序

層位	土層	厚さ(cm)	特徴
I層	黒褐色土層	15~20	粒子こまかく、ふかふか。茶木の白根寄生、耕作土
II層	黒色土層	20~30	やや粘質、一層と類似、下層に遺物
III層	茶褐色土層	約20	粘質、粒子微密、さくさく、包含層
IV層	褐色土層	15~20	硬質の火山灰層、粗粒を含み塊状に剥離する。根の実層、無遺物
V層	明黄色土層	1~1.5m	大三東ローム層、百花台遺跡の第Ⅶ層に比定、基盤。

包含層

第II層下層から第III層にかけ遺物を包含する。包含層第IIIまでの層位の深さは平均約60cmで、この地方の牛蒡の長さにも比定できる。そのため収穫時の遺跡損壊は決定的となる。しかし調査区の土層は幸運にも茶畑へ転作したため全面的土層の破壊をまぬがれた。

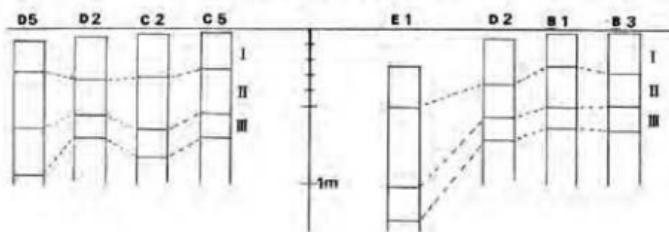
第5図 ポーリング地層柱状図

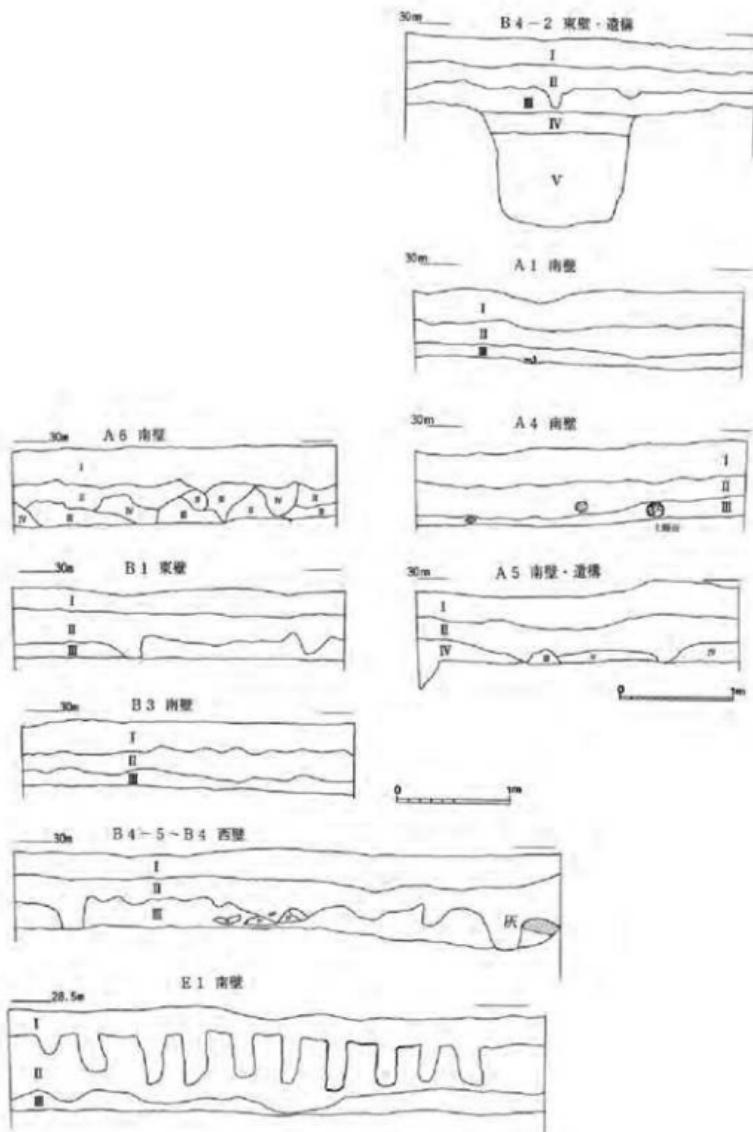


第6図 ポーリング位置と調査区

(註) 二か所のポーリングは
水栓調査のため有明町が
実施したものである。

第7図 調査区土層柱状図





第8図 土層図

3. 遺構

土層の搅乱と遺構

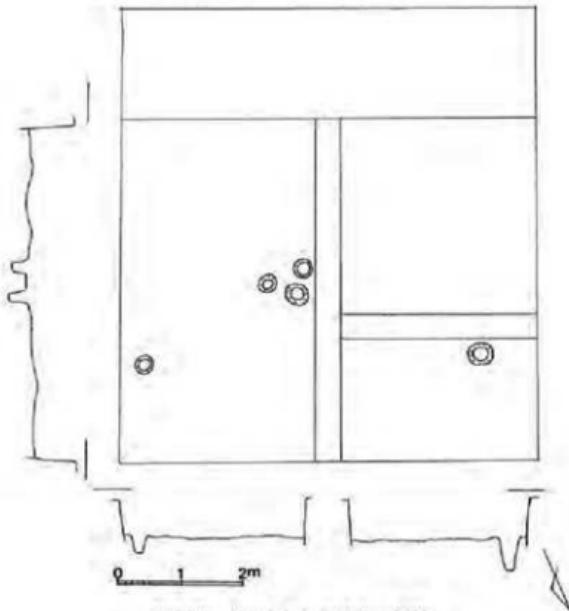
調査地はもと牛蒡畠であったことから、収穫期における深耕のため、遺跡破壊はまぬがれなかった。幸運なことに調査区は、15年程前に茶畠に転作しており、トレンディガーの利用が行なわれていないため、その被害も最小限にとどまっている。部分的には遺構に達する土層の深耕跡が残るが、ほぼ良好な形状を保っている。

ただし、E区は、最近まで牛蒡畠であり、土層の搅乱は激しかった。

A区の遺構

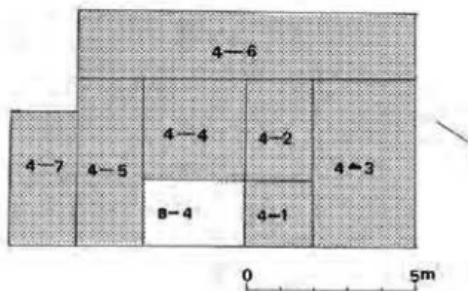
A区第4トレンチ南壁の壁面（第Ⅲ層）に、良好な状況で深鉢形土器の出土があり、また若干の土師器、須恵器とともに、柱穴状ピット（口径約40cm・深さ50cm）が検出された。

出土遺物の密度から、住居社の可能性が考えられ、遺物の広がりを見て東南方向に拡張トレンチを配置した。A4トレンチに東設したA4-2トレンチからは、豊富な遺物と新たに4基の柱穴が発見された。掘建住居社を想定させたが、遺構擾乱がはげしく、排土処理の困難さも伴ない、それ以上の追求はできなかった。



第9図 A.4 トレンチ遺構実測図

B区の遺構



第10図 B-4 拡張図

B区第4トレンチに須恵器壺、坏、黒色須恵器片、土師器など遺物の出土を見たが、その広がりが予想され、逐次（第10図）のように、B 4-1～B 4-7まで調査範囲を拡張した。

拡張したB 4-2トレンチ中央部に、層位をなす土器群の堆積があり、その下層から約1.5mの円形状土壙が出現した。

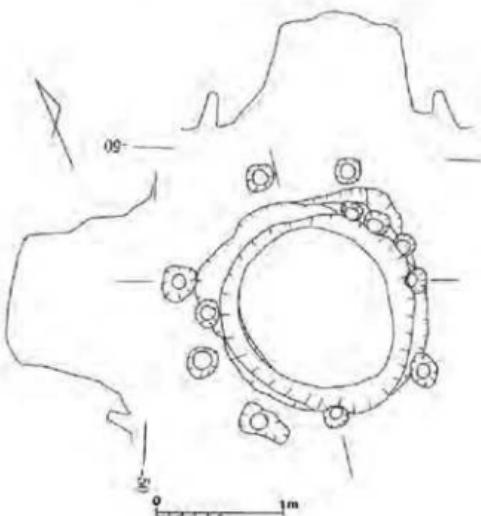
土壙は梢円状で深さ、底部の径ともに約1mである。整った形で掘られている。

壙口の周縁部には小ピットが配置され、12穴を数える。柱穴とも見られる。

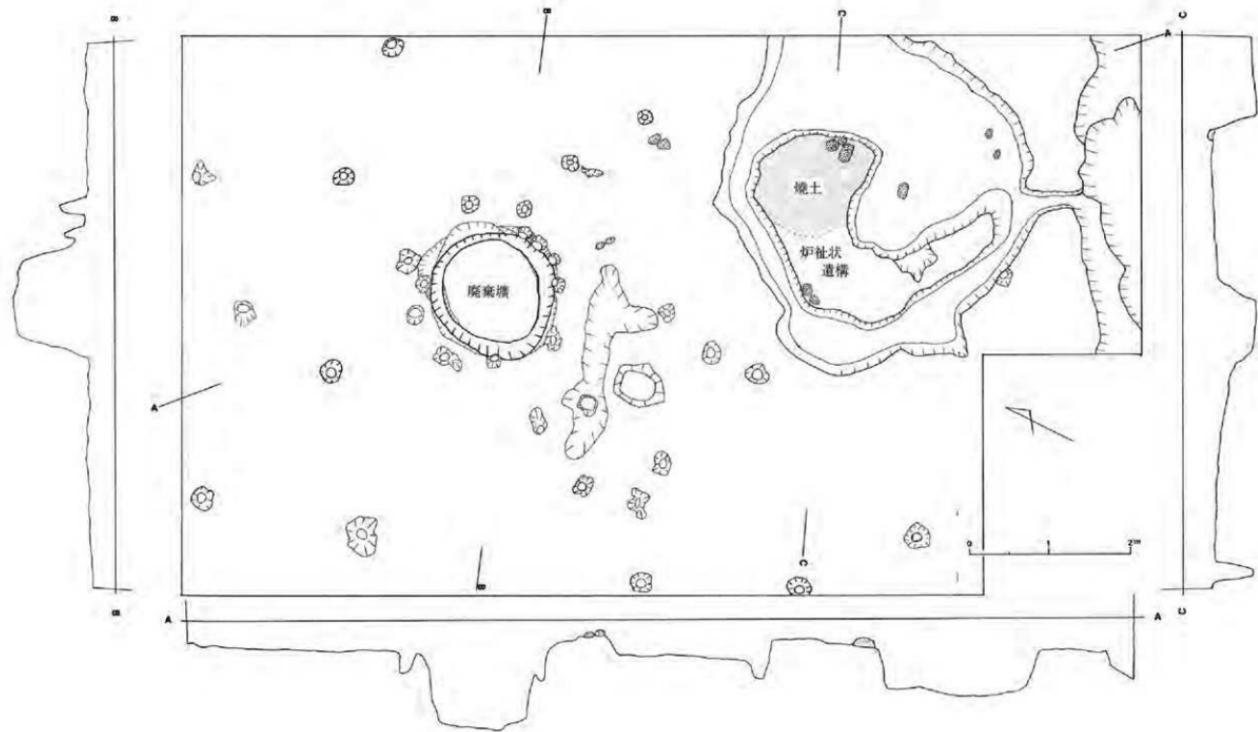
遺物が大量に投げこまれており、廐棄場と考察された。（第11図・第14図）土壙にともなう小ピットの配置は錯綜しており、柱穴を示すが、廐棄に伴なう供養祭祀も考察され、遺構の全般的な分析とともに今後の検討課題となる。

トレンチ全域に柱穴状ピットは散在する。系統性がなく、住居址の構造を特定することは困難である。

柱穴の規模は口徑約30cmで、廐棄壙縁部ピットを除き20穴が数えられる。



第11図 廐棄場実測図



第12図 B4 拡張区遺構図

炉社状遺構と周溝 トレンチ東半部に燒土・焼石・炭火物をともなう径約1mの円形状の遺構が検出された。火を焚いた痕跡を強く残すことから炉社と見られる。(第12図)

この炉社状遺構は、周囲を溝状の土塁で囲まれており、ナマコ形の小さな島のように奇妙な姿を示す。炉の部分はその先端部にある。溝の深さは約50cmで土層のIV層をくり抜き、V層ローム層に達している。東に向けて溝の排出口と見られる細い堀切りがあって、旧地形の傾斜面に通じる。溝からは投棄された土器が多量に出土した。溝の先端は隣地との限界線上にあり、遺構は約1mの落差のある隣地へ広がる可能性が予見される。

4. 遺物と出土状況

包含層と遺物

調査地大野原七反畠遺跡における遺物の包含層はⅢ層の黄褐色土層である。Ⅱ層の下層位からも若干の出土遺物を見たが、このⅡ層の擾乱は全遺構に共通し、Ⅱ層と遺物の関係は確認が困難である。

平成元年に県教委文化課が、近接する青年の家・経人の家建設に伴なう発掘調査を行なった地点では、同時代である奈良時代の遺物包含層はⅡ層と報告していることから、立地条件で層位と文化層の関係に変化があることも考慮する必要がある。

出土遺物は、土師器・須恵器が主体で、若干の鉄器・石器をともなう。出土した土器を縦年に照合すると、遺跡は奈良時代(8世紀)のものと判断される。

遺物のなかに绳文～弥生時代の土器・石器が僅少であるが発見された。擾乱層からの出土である。Ⅲ層の包含層にその時代の遺物が含まれないことから、文化層の複合は考えられない。

土器の器種は、皿・杯・蓋・壺が多く、高杯・鉢・瓶なども出土する。数点ではあるが黒色に焼した硬質の須恵器も混じっている。土師器と須恵器の比率はほぼ7:3である。土器の出土総数は約3万点である。復元可能な土器も多量と判断される。

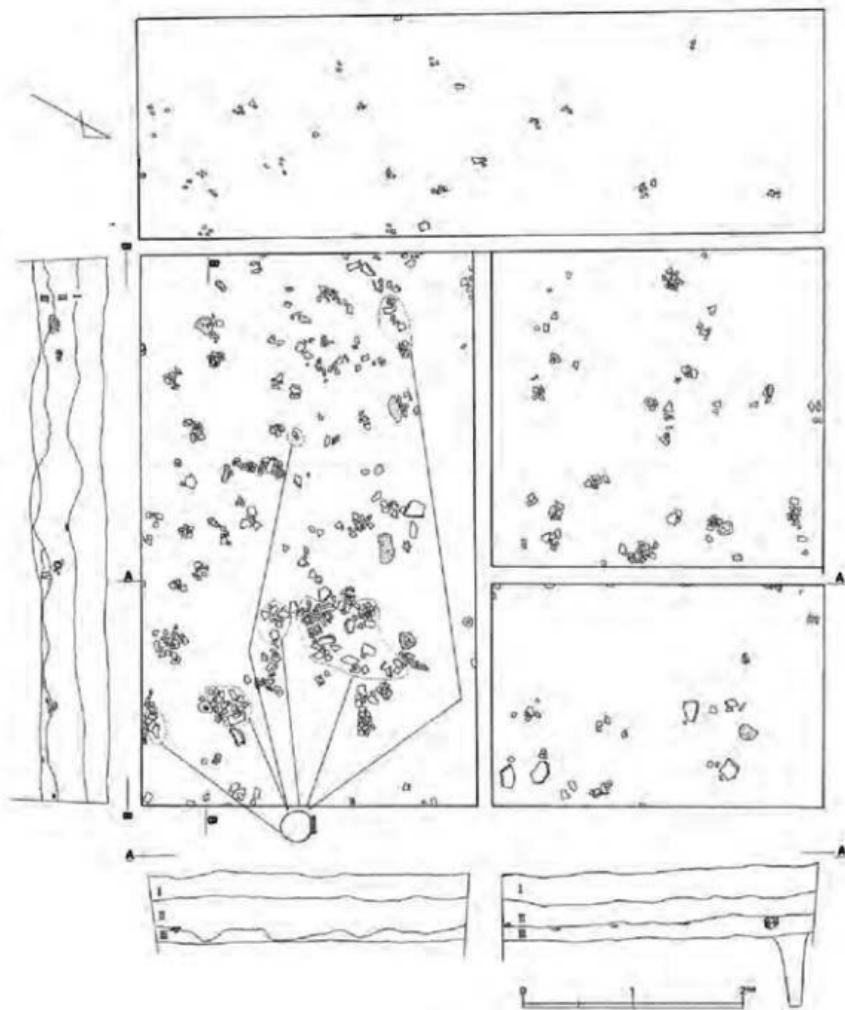
A 4 拡張区の出土状況 (第13図)

調査区域全トレンチから僅少の遺物は発見されたが、A 4・B 4トレンチに安定した包含層と、まとまった遺物の出土を見たため、逐次トレンチを拡張し、遺構・遺物を追跡した。ここではそのA・Bの拡張区について述べることにした。

A 4トレンチで土層の壁面Ⅲ層から、粗製の土師式鉢型土器が原型をおおよそ留めながら出土し、包含層位の基準が確かめられた。(第8図)

拡張したトレンチは土層の擾乱が著しく、遺物の移動も見受けられた。

東接して設けたトレンチで須恵器壺の破片を見たが、復元接合時点での移動が広範囲におよぶことが確認された。(第16図)牛蒡収穫時の深耕による二次的移動と考えられる。



第13図 A-4 拡張区の出土状況実測図

B 4 拡張区の
出土状況
(第14・15図)

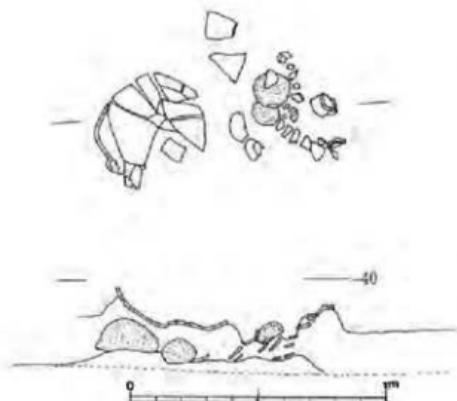
B 4 トレンチの拡張区は、廃棄場・炉状特殊遺構・柱穴などの遺構とともに豊富な遺物を埋蔵した。遺跡の中権部を占めるトレンチといえる。遺物は遺構の全面からくまなく出土するが、とりわけ廃棄場に堆積集中し、おびただしい量の出土を見た。

廃棄場の検証にあたって、遺物堆積の状況を把握するため、壙を南北に二分し、中心部にカット線を引き、立割りの発掘調査方式を取った。

さきにふれたように、遺物の量は廃大で土器が中心を占める。壙内の上層に土器に混じって刀子状の鉄器二点と、舟釘状鉄製品一点、壙外周辺から銛一点も検出された。獣骨は鹿で約一体分が出土したが角は一本で切断された約10cm程の先端部分のみである。壙の中腹部あたりから下層に向けて大量の貝が堆積したが、魚骨も発見された。

土器には完形品に近いものから細片にいたるまで多様であり、器種も多岐にわたることなど、遺構の状況から廃棄物処理施設と考えられる。

類似する遺構の発見事例に、佐賀県神崎郡吉野ヶ里遺跡がある。(註1) 吉野ヶ里遺跡志波屋三の坪地区では、建物群に接して多数の廃棄場が検出され、壙内から、須恵器・土師器をはじめ、訪錐車・轍・刀子・炭化物など廃棄の状況で出土した事例を報じている。また近くでは、有明町松尾遺跡で数か所の類似土壙が出土し、須恵器・土師器の多量出土が報じられている。

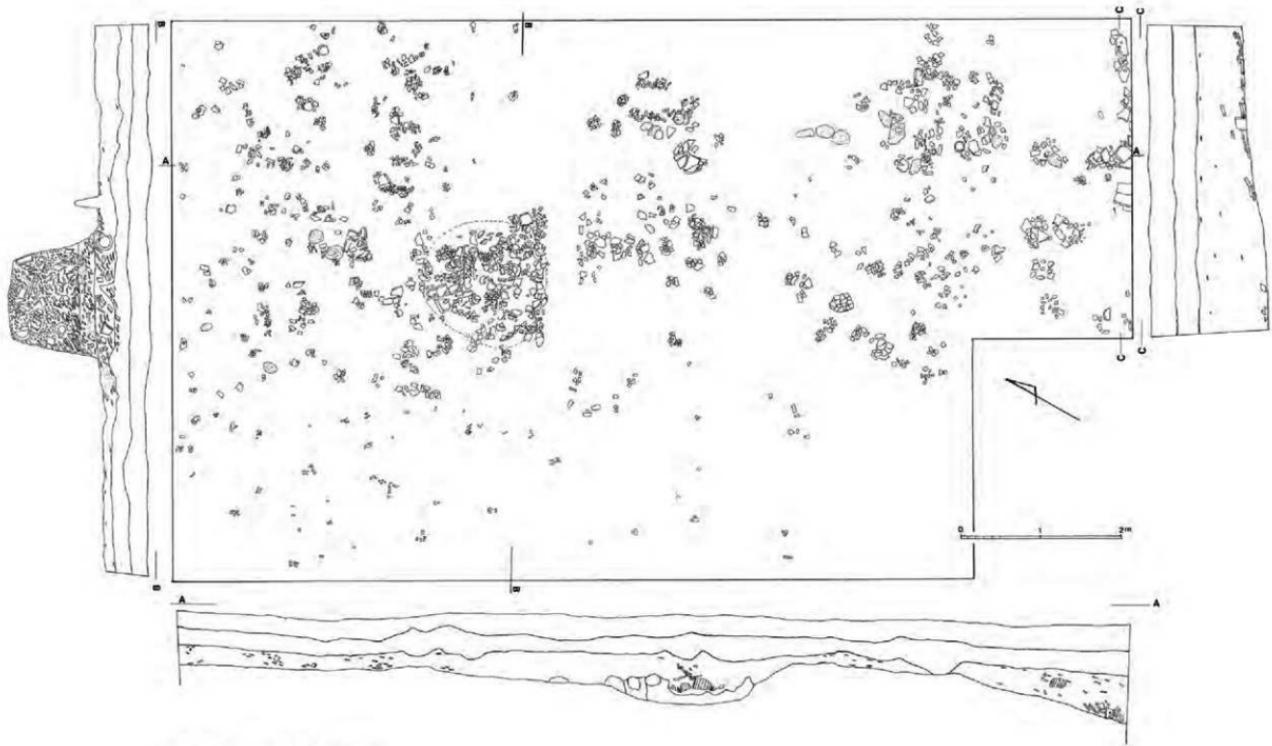


第14図 遺物出土状況断面図

B 4 拡張区は全般的に遺物の出土を見るが、この調査区全体が廃棄場的性格も持つ。

左の図(第14図)は、調査区の中央部北壁に近い地点での出土事例であるが、廃棄された土器の上に石が投げ込まれ、さらにその上層に壠が投棄されている。

また炉状遺構を巻く溝状の土壙内にも土器の堆積があり、大型壠の破片を中心とした土師器・須恵器の集中出土を見た。



第15图 B4 挖掘区遗物出土状况

IV 遺 物

(1) A 拡張区の遺物

A 4 拡張区の出土遺物は約1,000点である。土器が多く、須恵器も良好な資料が出土した。攪乱が著しく、二次的移動・破損がこの遺構全面に見られることは先に述べたが、復元可能土器もかなりある。ここでは形状を残しその特徴を把握できる何点かの出土品を取りあげる。

須恵器

壺

(1~3)
(第16図)

壺は(1・2・3)である。(1)は接合により完形に近い。口径21.5cm、胴部最大径40cm、高さ45cmである。色は黒褐色で体部外面に平行叩き、底部はナデ調整を施す。内面は円弧叩き痕を明瞭に残す。頸部は短く、くの字形に外反し、口縁端部は直線的に下方に下り肥厚する。体部は肩部から胴部にかけて大きくふくらむ。底部は欠落するが梢円状に近い丸底と判断される。口縁内面から頸部に×のヘラ書き陰線刻がある。

(2)は口径約21cmの灰褐色の壺である。口頸部は浅く外反しながら立ち、口縁部は丸味をもって肥厚する。肩部は張り胴部にかけて大きくふくらむ。体部外面は回転カキ目調整、内面は円弧叩きを施す。口頸外面にノ印の陰線刻が切られる。

(3)は頸部に凹線と沈線に縁取られた枠内に、二条の太目の波状文を有する長首状の壺の破片と思われる。口縁部は欠損する。頸基部から体部内面に叩き痕がある。暗褐色で台上に石英粉が混入する。

鉢型土器

(4~5)
(第16図)

(4)は頭部から口縁を残す鉢型土器の破片である。頭部に整った二条の波状文を施し、ゆるやかに口縁に向って内傾しながら立つ。口縁部は回転ナデにより上方につまみ出され端部は屈曲する。内面は円弧叩きを施す。

(5)は大鉢の破片である。頭部は複雑な波状文を有し、外反しながら立ち、口縁基部に凸唇を設けここから内折する。口縁は屈曲し端部は外反し張り出す。口縁部内面はナデにより内方に押し出され凸唇をめぐらす。

杯

(6~7)
(第17図)

(6・7)は杯である。ともにハの字型の高台を伴なう。(6)は杯身がやや外反ぎみに直立し、口縁部は丸味をもって外反する。回転ナデ調整を施す。器内面にノ字の陰線刻がある。(7)は黄褐色を呈し焼成度が低くもろい感がする。杯身上部を欠落するが、底部は張り出し、高台は外反しながらゆるやかに内湾する。器内面にヘラ削り跡を残す。

杯蓋

(8~10)
(第17図)

(8~9~10)は杯蓋である。(10)は完形品である。径9.5cm、器高3.1cmの小型で、天井部外面中央に宝珠様のつまみがつく。天井部はまるく湾曲し、口縁部でゆるやかに外方に押し出す。口縁内面には長いえりがつく。天井部に「ユ」のヘラ書き文字がある。「七」とも読めるが、一をしが

切っていないことから「ユ」と見るべきであろう。内外両面ヘラ削り調整跡を残す。

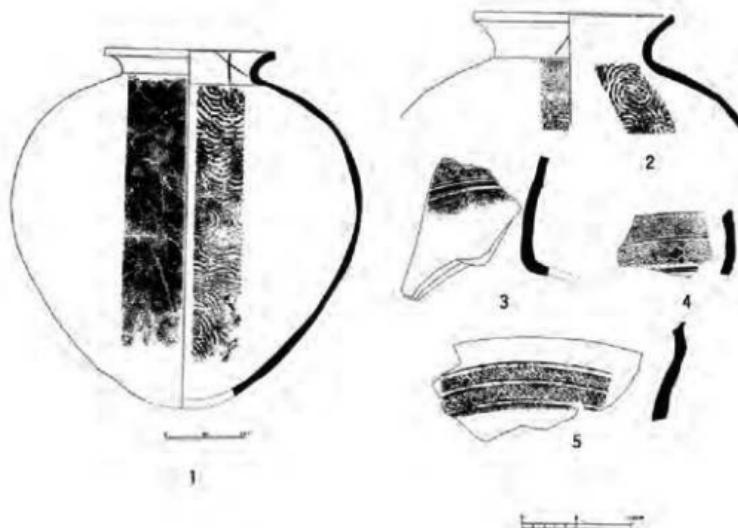
(8・9)は口縁、つまみの上部を欠落する蓋で、逆高台状の大きなつまみがつく。

高杯 (11・12・13) (11)は小型の器種で杯身は長く、脚部が短かい。杯底部は張り出し、杯身は僅かに外反しながら直線的に立ち上る。

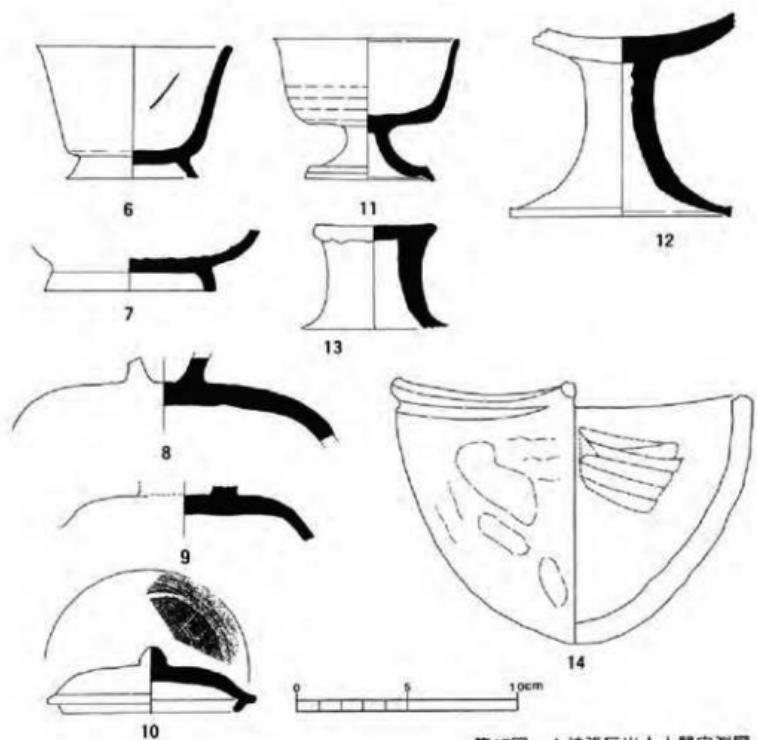
(第17図) 脚は短かく縁部が水平状に広がる。器面は回転ヘラ削りハケナダ調整を施す。

(12)は杯部を (13)は杯部・脚縁部を欠落する。いづれもヘラ削りナダ調整を行なう。

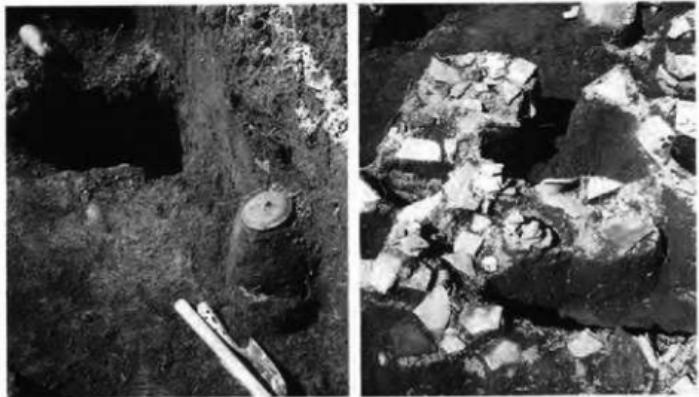
土師器・鉢型土器 (14) (14)は土師器鉢型の粗製土器である。器高10.7cm、口径15.5cm、手程で荒っぽいヘラ削り跡を残す。口縁部半面に三つの山形状の突起を設け、外折する端部の下に凹線を引く。一方半面の口縁は山形を切り端部はまるくおさめる。器面には炭化物が付着するが焼成時のものと思われる。



第16図 A 拡張区出土土器実測図



第17図 A拡張区出土土器実測図



蓋と甌の出土状況

(2) B 拡張区の遺物

B 4 拡張区の出土遺物は廃棄場を中心に甚大な量に達する。遺物の種類は土器を主とするが、獸骨・魚貝類・鉄器・石器・炭化物も共伴する。

土器は土師器が圧倒的に多く、須恵器も大量出土した。器種は壺・蓋・杯・皿・高杯・鉢・甌などである。土師器は壺が主流で、蓋杯・皿も多い。須恵器は蓋杯・皿が大量出土し、須恵黒色土器も若干ともなった。トレンチ東方の隣地限界線上の溝状遺構から、瓦器状大型破片がまとまって検出されたが、器種判定に必要な口縁部分はついに発見できなかった。

遺物の総量は魚貝類を除き二万数千点におよぶ。

須恵器

壺

(1～5) (第18図)
（1）は復元器高44cm、復元口径19cm、体部復元最大径38.5cmの壺である。形状は椭円状の円底で、体部外面は灰黄色を呈し、格子叩きを施す。内面は鮮やかな茶褐色に上部は円弧叩き、中央部から底部にかけてクシ搔きを施している。

(6) (第19図)
（6）は口頭部は短く外反し、口縁部は段差をつくり内折して立ち、端部は三角状に瘦身する。口頭部は回転ハケナナを施す。

（2）は小型の壺と判断される。口縁部が欠落している。灰褐色の硬質・精製土器である。体部外面は、肩部を回転クシ搔き調整、体部は格子叩きを施す。内面は円弧叩きで肩部はその上を回転ヘラケズリ調整する。形状は均整がとれ、肩部から底部にかけてゆるやかな曲線をえがき、尖底状の円底となる。

（3）は頸部と口縁を残すが、口径22cmで黄緑色に施釉し光沢のある美しい土器である。口頭部は外反し端部は屈曲して下方に下り肥厚する。口縁部に二条の凹帯をめぐらす形状をつくる。台土は精製されている。（4・5）は小型の口縁部のみを残す破片である。（4）は黒褐色で台土に石英粉を混入する。口頭部はゆるやかに外反し、端部は外方に直線的に外傾する。

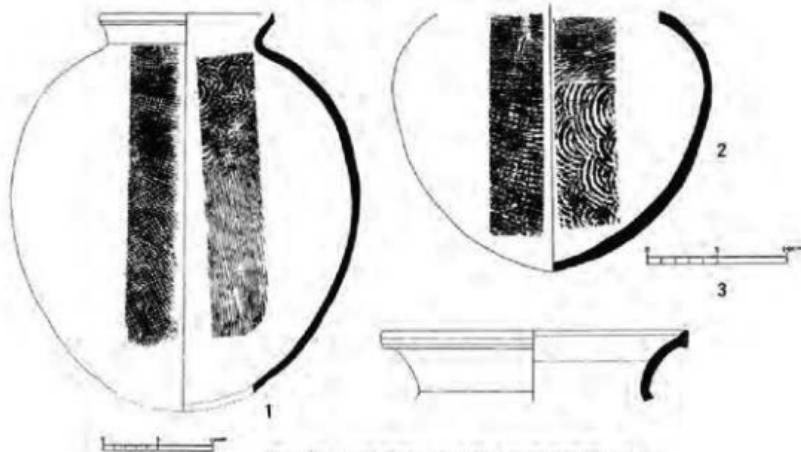
（5）は明灰色の精製土器で、内外面に回転ナデ調整を施す。口縁部に凸帯を設け、端部は三角状に瘦身する。

鉢

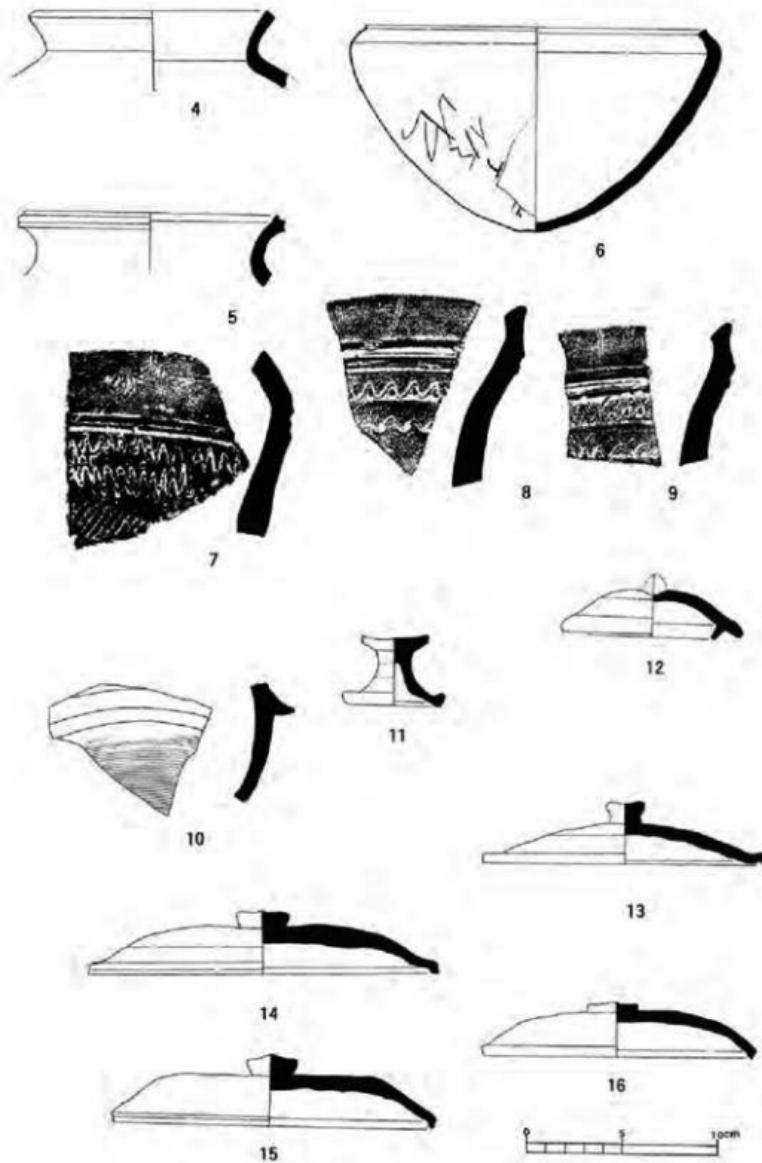
(6～9) (第19図)
（6）は鉄鉢である。明灰色で器高10.5cm、口径17.3cmの均整がとれた完形に近い復元土器である。口縁部は回転ナデにより内折し、端部はわずか外方につまみ出される。器形は鉄鉢状で、底部は尖底に近い。体部外面はヘラみがき、口縁部・内面はナデ調整を行なう。体部外面にヘラ書文字があるが、陰刻が浅く判読ができない。底部に文字らしき陰刻があるがその部分が欠落し接続するのか、別の陰刻か判明しない。（7・8・9）は広口鉢の破

- 片で、体部に波状文を有する。(10)は蓋の形状を示す破片である。体部に約1.5cmの鶴をめぐらす。(11)はミニ高杯で杯の部分を欠落する。
- 杯蓋**
- (12~34)
- (第19図)
- (第20図)
- 蓋には、形状が天井部にあくらみを持つものと、平坦な頂部を持ち、口縁に至る途中で内折傾斜するものに分けられる。また(12・18・25)を除き天井部中央に擬宝珠様のつまみが付き、器内面では(12)を除き口縁部のかえりが消失して、口縁端部を屈曲させそれに代行させる形となる。器形の大きさも大小各種に分類され、口縁径20cmを超えるものから15cm以下のものまで多様である。多くは器外面を回転ヘラ削り調整、口縁部と内面を回転ナデ調整を施している。

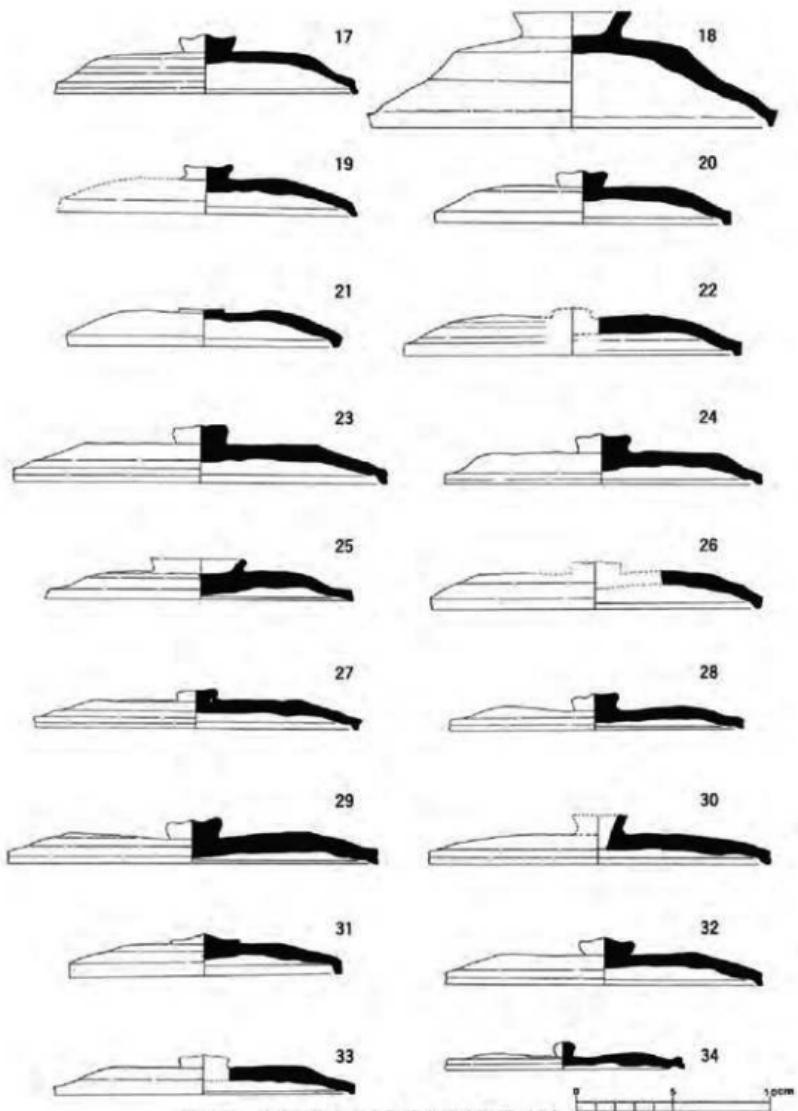
(1)はつまみが欠落するが、口径9.5cmの小型で、内面口縁部に長いかえりを持ち、A4拡張レンチの(10)と同形状のものである。(14・23・29)は径19cmの大型で、原形を良好に残す。(14)は天井部にややふくらみを持つが、(23・29)は器高約4cmで全体が平坦化する。(34)は出土品中最も小型で口径13cm、器高2.5cm、天井部が板状化した扁平の蓋である。(18・25)は、つまみが大型化し擬宝珠形に代って、逆高台状のものがつく。(18)は大型で、口径21cm、器高6cmで鶴蓋状の形をとる。ヘラ削りで器面を調整し、重厚で均整がとれている。(25)は口縁部の一部を欠落するが、回転ヘラ削り、ナデ調整を施し、高温で焼かれた最も美しい器である。天井部半面に自然釉がかかり、火照状に赤銅色が走っている。



第18図 B拡張区出土土器須恵器実測図(1)

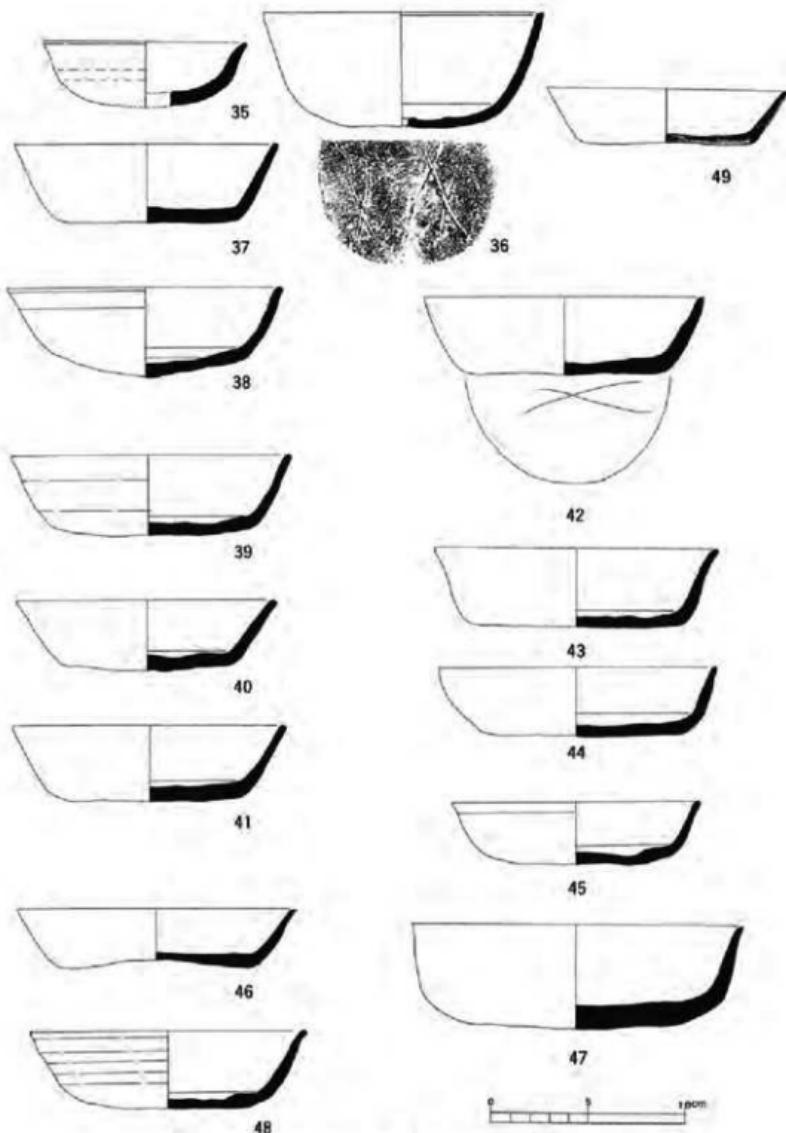


第19図 B 拡張区出土土器須恵器実測図 (2)



第20図 B 拡張区出土土器須恵器実測図（3）

- 蓋杯** 蓋杯は須恵器の出土中もっともその量が多い。細片を含めるとはう大な数に達する。出土する杯身が、蓋の出土量と比較して多いことから、蓋を伴なわない杯身自体の独立化が考えられる。杯身には、高台を伴なうものと伴なわないものの二種類がある。形状も大小・器高・焼成度と硬質度・色彩など違いがあるが、杯身の立ち上り、口縁部の成形などはほぼ共通する。
- (35~49) (35~49)は高台を伴なわないものである。平底で、立ち上りは外反し、口縁部は僅かに外反するものと直立するものがある。(35)は口縁推定約10cm、高さ約3cmの小型である。黒色で一部に灰かぶり跡に黄色の斑点群がまじる。口縁部がナデられて外方に引き出され端部は丸味をもって外反する。(36)は灰白色の器高5.7cmで焼成時における器形の伸びみがある。内面に煤の付着がある。外面底部に××の陰線刻がある。
- (37)は均整が取れた灰褐色の焼の良い杯である。回転ヘラ→ナデ調整がていねいに施されている。(38~40)は灰褐色の完形に近い均整が取れた良好な杯である。(38)は底部中央部が若干突起する。(39~41)は黄灰色で口径14cmと3.5cmであるが、いづれも回転ナデ調整を施しよく成形している。
- (41)は口縁部に虫喰い状の損傷があるが完形出土である。(42~45)の外面底部にはそれぞれ浅い、細い線のヘラ陰刻×印がある。(40~41~46~49)は器高が3cm程度に低く抑えられており、立ち上りが広がるように外折し、口縁部は外反して、背高の皿状の形状を呈する。(46)の底部中央は内反する。
- (47)は径16.5cm、器高5.0cmの大型である。上方に直線的に立ち上り、口縁部は外反して端部はナデられて外方に引き出される。よくナデ調整がなされているが、底部背面は荒っぽいヘラ削り、未調整の跡を残す。焼成時のものと思えるが、器形のねじれがあり、変形する。
- 高台付杯** (50~52) (50~52)は口径13cm、器高4cm程度の杯である。やや外反しながら立ち上り、口縁部でゆるやかにさらに外方へ反る。端部は外反しまくるおさまる。高台は(51)がハの字に開き、他は直立する。回転ナデにより口縁部を外方に反らす。(53~54)は杯身は立ち上りが外傾し、(53)は口縁端部が外反し、(54)は直線的に丸くおさめる。脚部はハの字に開くが(53)は脚基部が屈曲する。
- (55~57) (55~57)は立ち上りが内湾しながら外傾し、口縁端部はまるめる。高台は(55~56)が凹帯を設けるが(56)は高台を垂直につける。(57)は大型杯である。明灰色で口径18cm、器高5.8cm、立ち上りはやや内湾気味で端部は外反しまくるおさめる。



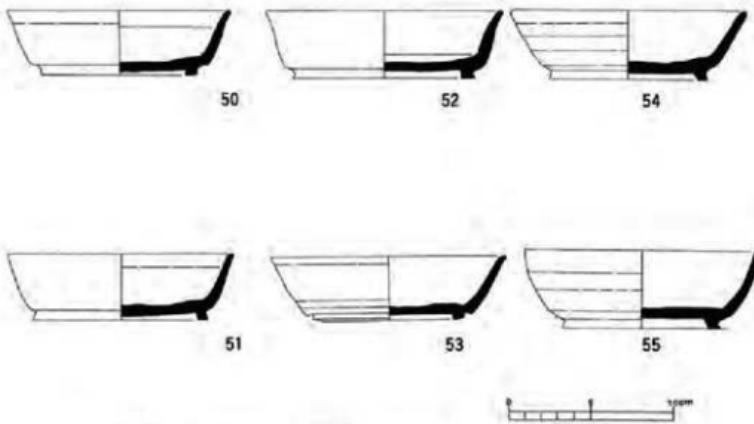
第21図 B拡張区出土土器須恵器実測図(4)

(58~60) は、立ち上りが直線的に外反し、(60) を除いて高台は垂直につく。(58・59) には、底部背面にヘラガキ陰線刻×印を付す。(61) は、体部ならびに口縁部が外反し、高台内面が内湾状につく。(62) は、口縁部は外反、高台も外反する。(64) は、直線的に体部が立ち上り、端部は丸くおさめるが、高台は短かく、屈曲させて外反する。底部背面に×の陰刻がある。

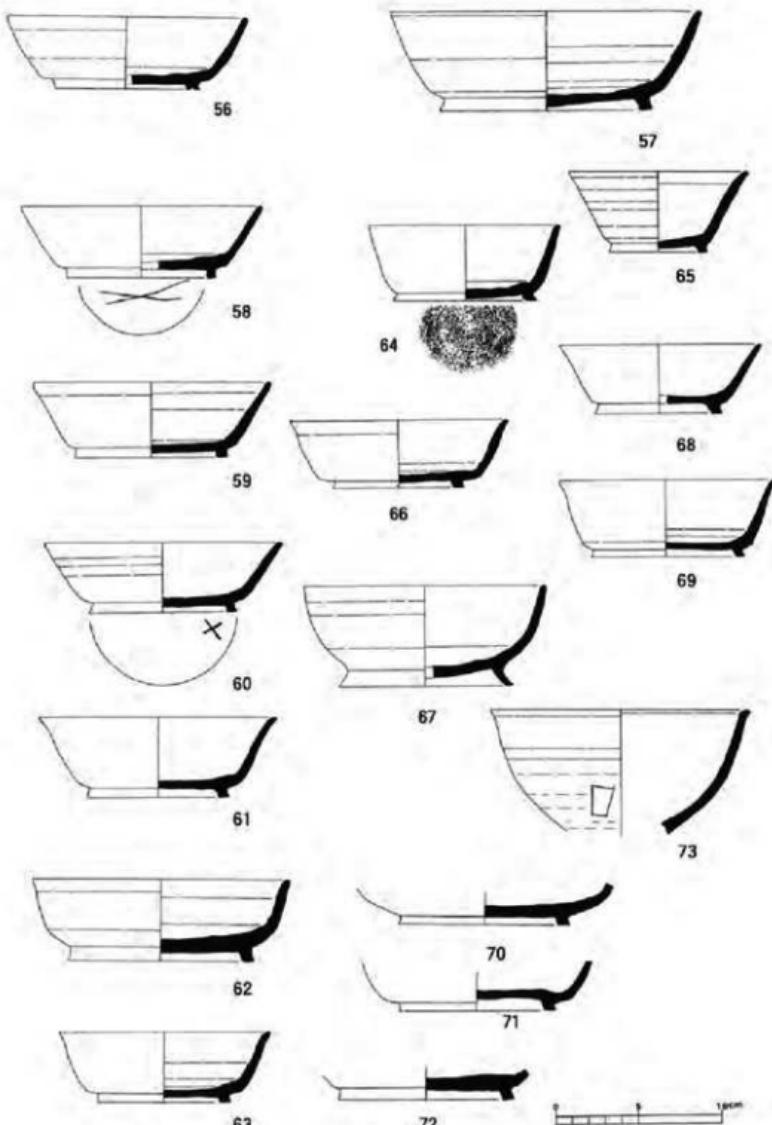
(65) は黄灰色に褐色が口縁部から内面にかけてまじる整った器形を持つ。器高5.0cm、口径10cmで細身、背高の杯である。立ち上りは外傾直線的で、口縁部は外反する。高台はハの字形に開き底部に凹帯をめぐらす。

(67~69) は黒色のいぶし土器である。炭化物が器面に良好に侵透する。(67) は体部が内湾しながら僅かに外傾し、口縁端部は外反する。長くて細い高台が付き外反する。器外面は回転ヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。

(68) は、直線的に外反し、端部はまるく外反する。高台はハの字に付く。器面はヘラケズリ、内面はハケ目調整する。(69) は口縁部下方で外傾し、端部は細く外反する。土台に石英粒が混入する。(70~72) は体部から口縁部を欠落する。大型の杯である。(73) は鉢型状の杯である。口径15cm、器高は約8cm程度と思われる。内湾しながら外傾し、口縁部は外反する。端部は外方へナデられ引き出される。青灰色の器面に方形状の陰線刻文がある。



第22図 B 拡張区出土土器須恵器実測図 (5)



第23図 B 拡張区出土土器須恵器実測図 (6)

皿

(74~82) 皿の出土は比較的少ないので、大型のもの

(第24図) のが多く、いづれも焼成時のものと思われるが器形にゆがみが見える。(74) は

(第25図) 器高3cm、口径20cm、灰褐色で、口縁部は外反し、端部は外方に僅か反る。器内面

にはヘラ削りの跡を年輪状に深く残す。

内外面とも回転ヘラ削り後ナデを施す。
底部背面には××が左右に刻まれる。

(75・76) は口径19~18cmで灰褐色、
それぞれ口縁部は外反し、背面に××の
陰線刻を有する。(75) の底部外面には
放射線状のススが走る。いづれもヘラ削
り後ナデ調整を施す。

(77) は黄灰色、口径18cm、器高2.2
cmの、平板で仰器状を呈する。口縁部は
外反し、端部は外方に引き出され、口縁部
内面にヘラ削り溝を残す。底部背面には
規則正しい年輪状のヘラ削り跡がある。

(79~80) は茶褐色、(81) は黄灰色で
あるが、(81) は小型で口径15cm、口縁
部基部に凹帯を設け、そこから直線的に
外反し立ち上る。いづれも回転ヘラ削り
後ナデ調整を施す。(82) は口径15cm、
器高1.5cmの黒色土器である。器面全体
に焼しが侵透しており炭化が定着する。
2分の1程を欠落するが、器形・成形手
法は他と同じである。



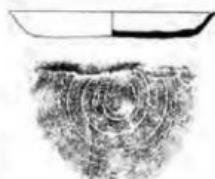
74



75

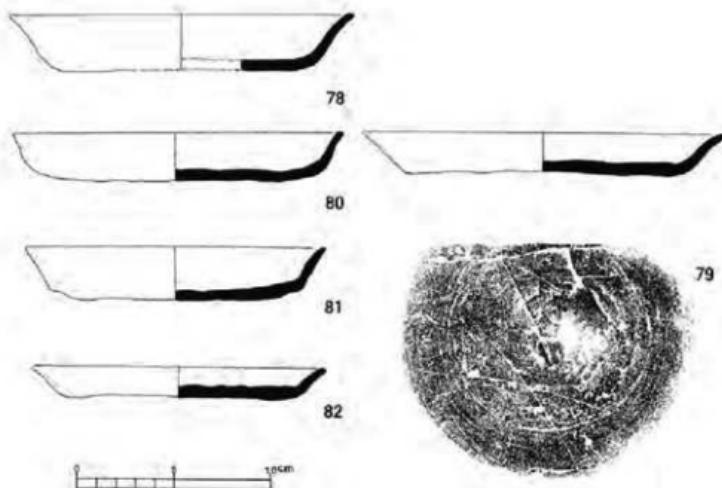


76



77

第24図 B 拡張区出土
土器須恵器実測図 (7)



第25図 B拡張区出土土器実測図(8)

土器

甕 83~101
103~120
第26図
1
第28図

土器のなかで甕はもっとも出土量の多い器種である。復元できだものは(84・85)である。甕の形状は半球形状と筒形状を有するものがあり、口縁部はゆるやかに外反するもの、水平状に外折するものがある。また口縁部が外方へ長く張り出すものと短くくつまみ出されたものとある。多くは口縁部が肥厚し、体部、底部は瘦身する。体部外面は多くはハケ目調整、内面はヘラ削り、口縁部はナデ、ハケ目跡を残す。色は茶褐色が多く、黄褐色もまじる。器形は概して口縁部に対し、胴の張り、ふくらみが少ない。円底で、口径、器高にも大小変化がある。

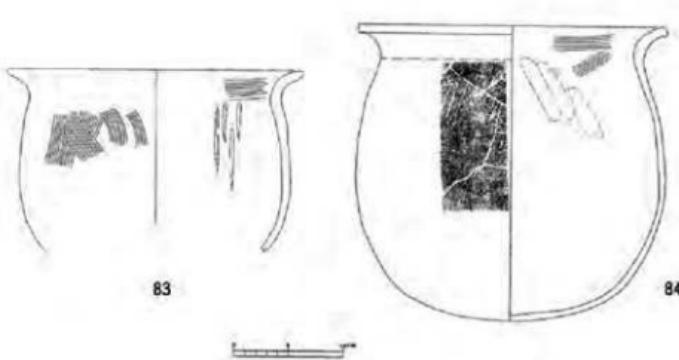
(83・84・85・96・97・98・101)は口縁部が水平状に外反し、外方へ張り出し肥厚する。端部はまるくナデられる。(98)は口縁部が鋭角に外折し、胴部も張り出す。(84)は口径27.5cm、高さ26cm、形状は体部が下ぶくれ円底となり、体部外面はハケ目、内面はヘラ削り調整を施す。口縁部は肥厚して、下方は屈曲する。(85)は底部を欠落する。口縁部は肥厚し、短い口頭部から、くの字型に外反し、内面は内湾気味となり、回転ハケ目調整する。口径24cm、器高約26cmである。

(87・88・101)は、口縁基部から下方体部に垂直状につながり、体部は張りがなく形状は筒状となる。口縁部は体部より外方に張り出す。(100)は口縁部、体部上方を良好に残す。口径は11cmで壺型土器と判断

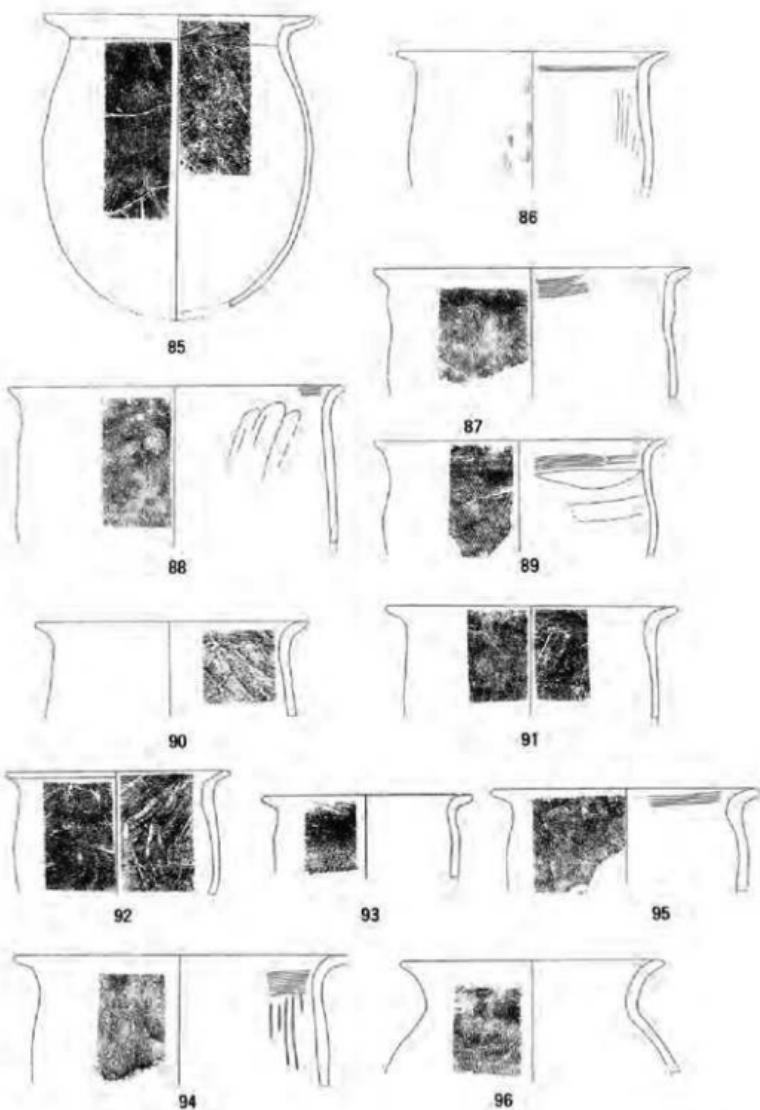
される。口縁部は短かくゆるやかに外反し、体部外面にはハケ目、内面は荒いヘラ削りを施す。(89・92・93・99)は短い口縁部が水平状に外折し、端部は外反しまるくおさめる。(89)は体部外面にクシ目を施す。(103・120)は口縁部の一部を残す破片である。出土品の整理がまだ終っていないため、接合、復元の可能性を予測させるものである。

瓶形土器

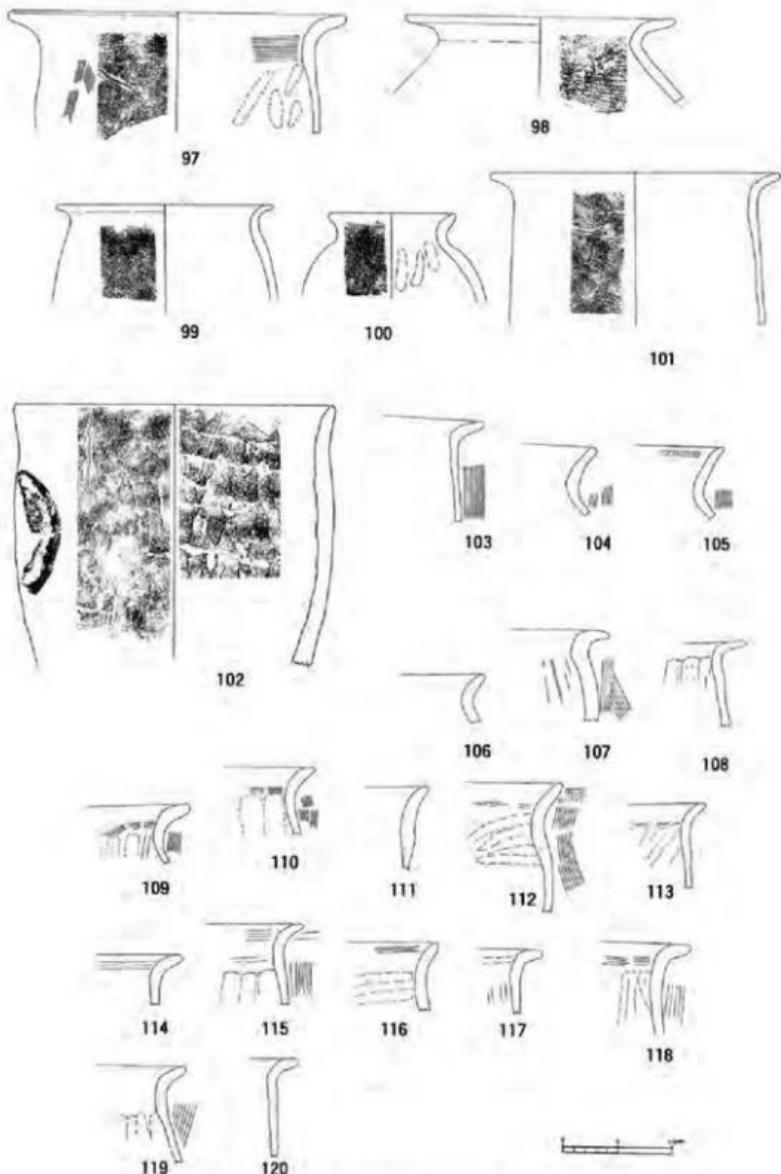
- (102) (第28図) (121) (123) (第29図)
- (102) は把手付き瓶形土器と判断される。底器が欠落するが平底と思われる。深鉢形で体部にふくらみがなく、筒形で口縁部は僅かに外反する。全般が肥厚し、輪積成形の跡を内面に残す。把手は欠落し、張り付痕を明瞭にとどめる。体部外面はナデ→クシガキ調整を施すが、内面は荒っぽいヘラ削りである。
- (121) は瓶形土器の竈に当る部分である。焚口の庇と判断される。竈の体部にあたる部分の一部が残るが庇は体部に張り付け接合している。
- (122) も竈にかかわる一部と考えられる。上部は厚く底部は細くなる。体内面には粘土をつまみ取った跡を残し、ヘラ削りで底部を瘦身される。形状は、切断された断面があることから、半円形状が想定され、頂部が大きくふくらみ堅牢であることから簡略化した竈と考察される。(123) は把手である。調査地から数個出土したが接合できる焼、甌は発見できない。この把手は、(102)と同一遺構から出土しており、関連遺物の可能性が強い。



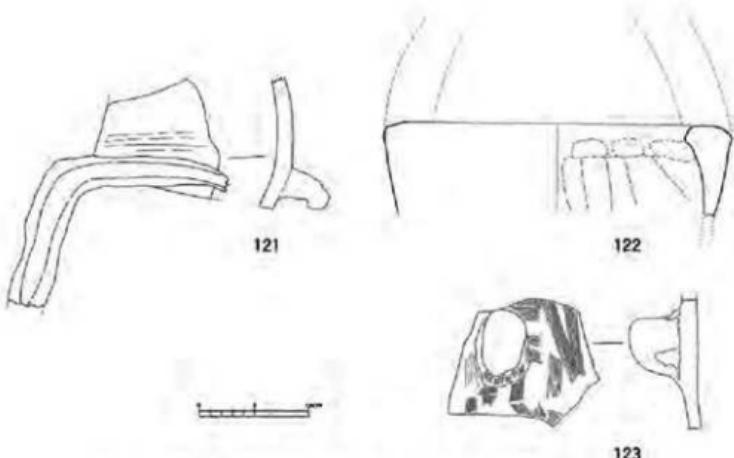
第26図 B 拡張区出土遺物土器実測図 (1)



第27図 B 拡張区出土遺物土師器実測図 (2)



第28図 B 拡張区出土遺物土器実測図 (3)



第29図 B拡張区出土遺物土器類型土器実測図

高杯

(124) (125) (126) (第30図)

(124)は器高6.7cm、口径15.5cm、(125)は器高7.2cm、口径15cmの高杯である。いづれも杯部、胸部ともに低く圧えられた精製土器である。杯部は皿状で底部から内湾気味に外反し、口縁端部は回転ナデにより外方へ水平にのびる。脚部は短脚で底部にかけて大きく開き、端部には高台がつく。赤黄色で全体に回転ヘラ研磨が行なわれ、化粧土が施される。

(126)は手捏粗製の高杯状土器である。杯部を欠落するが、基部に粘土帶を押しつぶして巻きつける。脚部の中央部に円形透しを2ヶ所設けている。

盤型土器

(127) (第30図)

(127)は盤である。口径20cm、器高4.2cm、明黄色の精製土器である。杯部口縁部はゆるやかに外反し、端部はまるく外方に反る。脚はハの字型に開き端部から内方に屈曲して高台状を形づくる。器面全体にヘラ研磨を施している。

鉢型土器

(128) (129) (第30図)

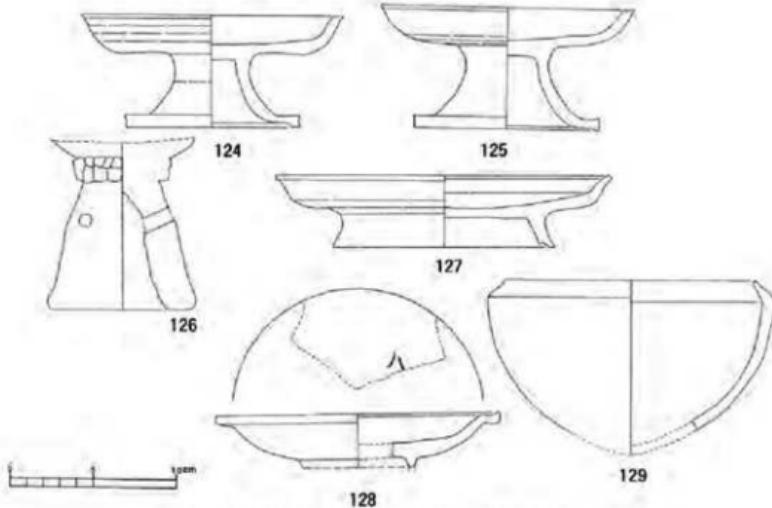
(128)は皿状の浅鉢と見られる。高台部が若干欠損し形状は不明である。口縁部は屈曲して外方に引き出され、端部はナデられて上方につまみ出される。杯部内面にハの字の陰線刻がある。明黄色の研磨された精製土器である。(129)は鉄鉢状の鉢である。口縁部は内折し端部は細くまるめられる。底部を欠落するが尖底状のまる底と判断される。体部内面に丹の斑点が確かに残る。

手捏土器

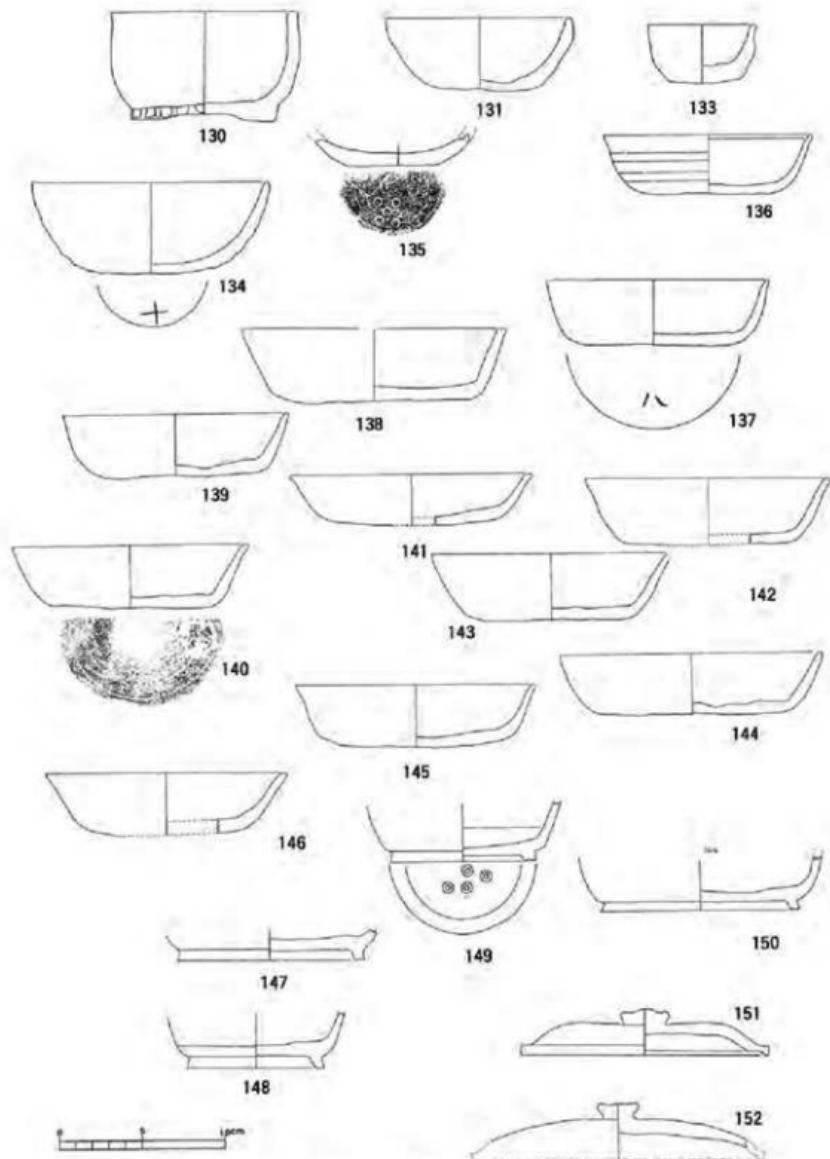
(130) (131) (132) (133) (134) (第31図)

(130・131・133・134)は杯状の手捏土器である。(130)は灰褐色の器高6.5cm、口径11cmの楕で底部につまみ出した不整形の高台がつく。(131・134)は丸底の楕で器形はいづれも類似するが、(131)には器内面に丹を施

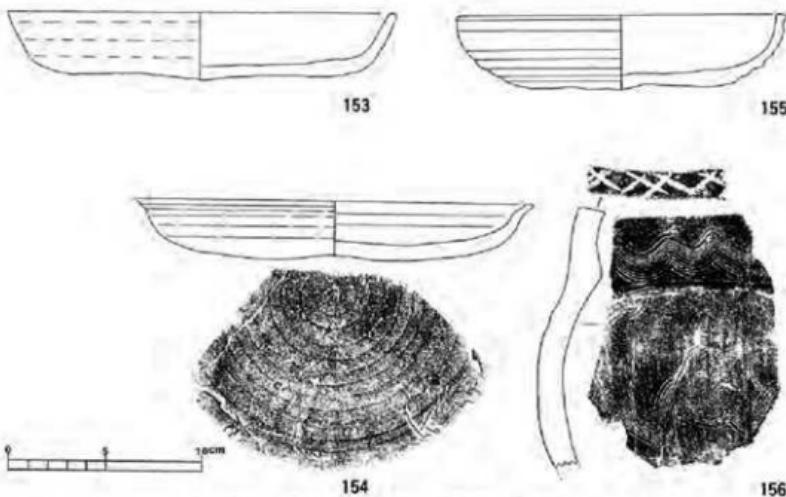
- した跡が残り、(134)の底部背面には十の陰線刻がある。(133)は器高3.5cmの小型の土器で口縁部に煤が付着する。(135・149)は、底部背面に竹管文を施す平底ならびに高台付碗である。いづれも底部のみを残し欠落する。(136)は化粧土を施し、その上に、器外面と口縁部内面に暗青色の釉薬を施す美しい精製土器である。外面はヘラ削り、内面はナデ調整する。(137)は器高4cm、口径13cmであるが、底部背面にハの陰線刻を施す。器外面はヘラ削り、内面はナデ調整し器形は整っている。口縁部の一部を欠落する。
- 蓋 (151・152) は碗蓋である。須恵器に比べ、この器種の出土は極めて少ない。形状は須恵器蓋と共通する。天井中央部に擬宝珠形のつまみが付く、天井部は水平状で端部で湾曲する。天井部は回転ヘラ削り内面はナデを施す。(152)は丁寧なヘラ磨きである。
- 皿 (153) は皿である。(153・154)は口径約19cm (155・156)は口径約17cmである。いづれも器内外面とも回転ヘラ削りによる螺旋状のヘラ跡を残す。
- 大型壺口縁 (156) (第32図) (156)は大型壺の口縁部破片である。弥生土器を思わせる赤褐色の分厚い土器である。口縁部基部に突帯があり、これを境に口縁部、体部へそれぞれ内湾して波状文をめぐらす。口縁部端部から内方にかけて×状の太い陰線刻がある。



第30図 B松張区出土遺物土器高杯・盤・鉢実測図



第31図 B 批張区出土遺物土師器椀・蓋実測図



第32図 B 拡張区出土遺物土師器皿・變実測図

その他の遺物

鉄器・鐵鏃

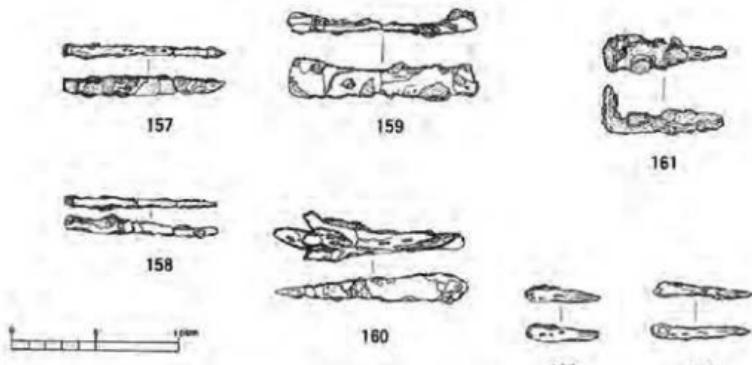
(157)

l

(163)

(第33図)

(157～159) は刀子状の鉄器と見られる。(157・158) は長さ約10cm程の棒型で、(159) は刀身幅が広くなる。先端部分は欠損している。(160) は鉗状の鉄器で穂先は三叉となる。(161) は舟釘状鉄器で、頭の部分はL字型の帽子がつく。(162・163) は鉄鏃で丸釘状を示す。いづれも腐蝕が激しい。出土地点は廃棄縄ならびに周辺である。



第33図 B 拡張区出土遺物鉄器実測図

獣骨 廃棄壙から、土器、貝の堆積にまじって鹿骨が約一体分程出土した。角は最下層部から発見されたが、角本体から切断された先端部分一点である。保存状況はよく形状を保っている。焼骨化した大腿骨関節部分も一点まじっている。(図版25)

貝類 廃棄壙の中位上層から下層部にかけて大量の貝が層をなして出土した。有明海に産するもので、もっとも多量出土するのはアサリ、カガミガイ、マガキで、イタボガキ、ホソヤツメタ、サザエ、コシダカガンガラ、ズガイ、クボガイなども混在する。また魚骨も僅かではあるが検出された。

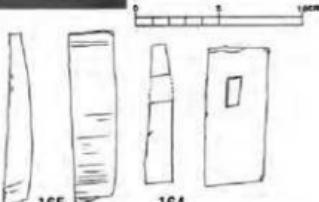


廃棄壙から出土した貝の種類

円面鏡脚部 (164・165) はいづれも廃棄壙から出土した須恵器破片である。黒褐色を呈する方形板状で上方、下方ともに破損分離痕を残す。(164) は長さ約10cm、巾2.5cm、やや湾曲して一方が肥厚する。(165) は長さ約8cm、巾3.5cmで長方形の透しがある。形状から判断して円面鏡脚部の透し部分の破損物と考えられる。この二つは形状の違いから別器種のものである。

遺構からは、本体の硯にかかる部分は発見されない。また墨書き器も検出されなかった。

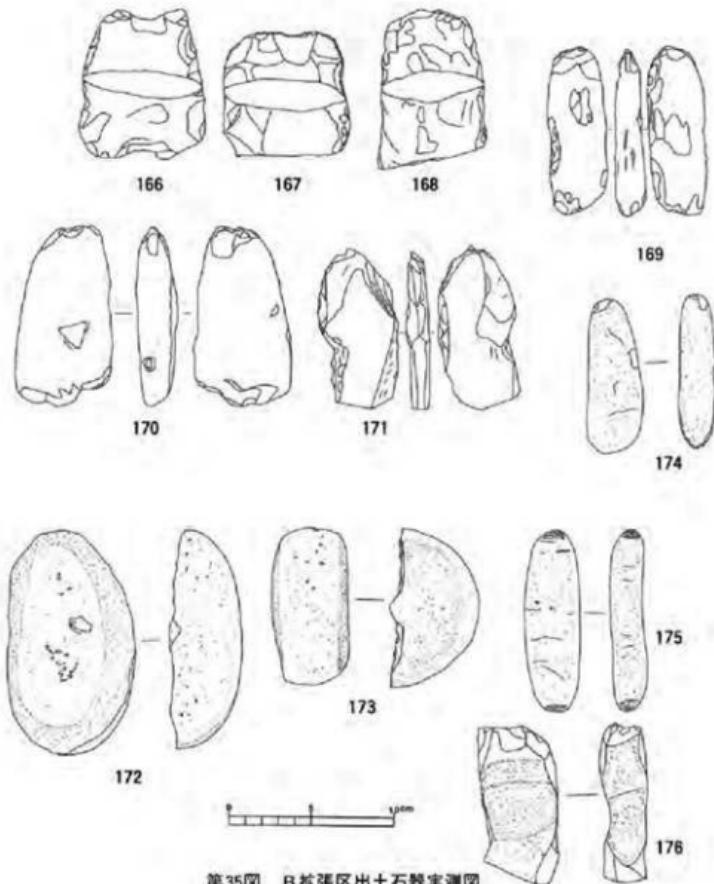
石器 石器はこの拡張区で10数点、調査地全トレンチで約30点が出土した。多くは縄文、弥生時代にかかるもので、出土土層が擾乱層を主としていることから、遺構との関係は明確でない。また弥生時代の土器破片数点も出



第34図 円面鏡脚部実測図

土したが遺跡の復合を考えさせる資料にはなり得なかった。

(166・167・168・171)は打製石器で、(166)は石錘、他は石斧である。材質は(171)が結晶片岩で、他は地元の安山岩である。(167)は刃部中央部は摩耗し使用痕を残す。(169・170)は磨製石斧である。素材は蛇紋岩でどちらも損耗が激しい。いずれも炉状遺構周辺部からの出土であるが、(170)は火に当てられており赤褐色に変化した焼跡がある。(172・173・174・175)は敲石である。(172)を除き、使用痕が良く残る。(176)は砂岩の砥石である。両面に磨耗した砥跡がある。



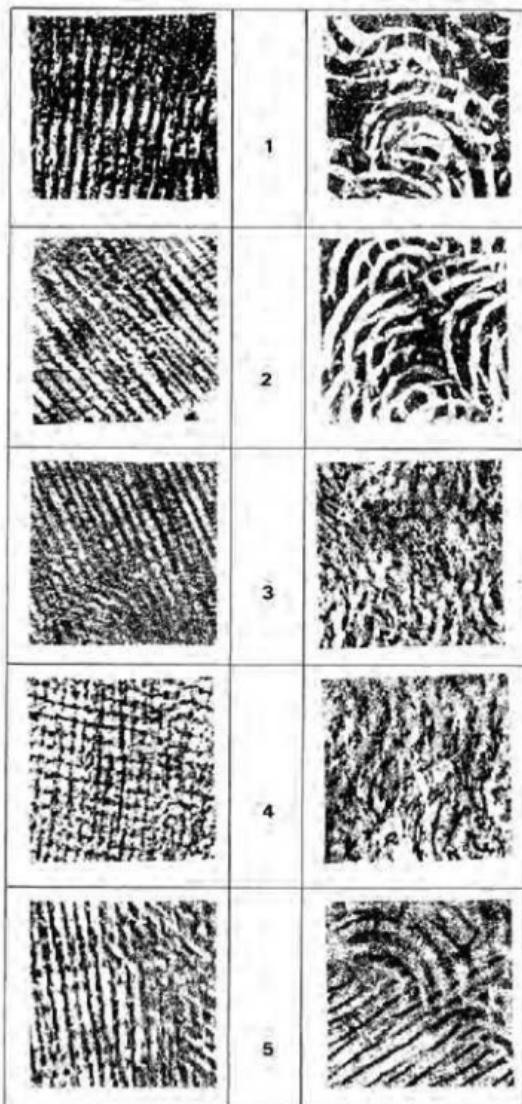
第35図 B拡張区出土石器実測図

大型須恵器叩き痕

B 拡張区東端の溝状造構の漆層部を中心に、大型壺を想定させる分厚い体部の破片が出土した。破片は同一器体と判断されるものも含むが、多くはばらばらである。破片の曲線から數十cmに達する大型土器と思われる。(第36、37図)は器体内外面の叩き圧痕である。

(1・2・3・5・6・7・8)は、外面に平行叩き、内面に円孤叩きを施す。(6・7)はA拡張区、(5)はD-2トレンチ出土で他は、B4拡張区溝状造構出土である。(1・4)は20cmを超す大型破片で、(1)は自然釉薬がかかり光沢がある。(4)は、外面に網目状の格子叩き、内面は円孤叩きである。(5)は焼成が悪く、土師器状の黄色を呈し、内面は上部が円孤叩き、下方部は平行叩きである。

(10)は内底の底部を思わせる約40cm程の大型接合破片である。外面はカキ目の上をナデ調整する。広い範囲にわたって黒褐色に炭化物が浸透し、そのなかに2か所成形時の葛の付着跡をまるく残す。



第36図 大型須恵器叩き痕 (1)

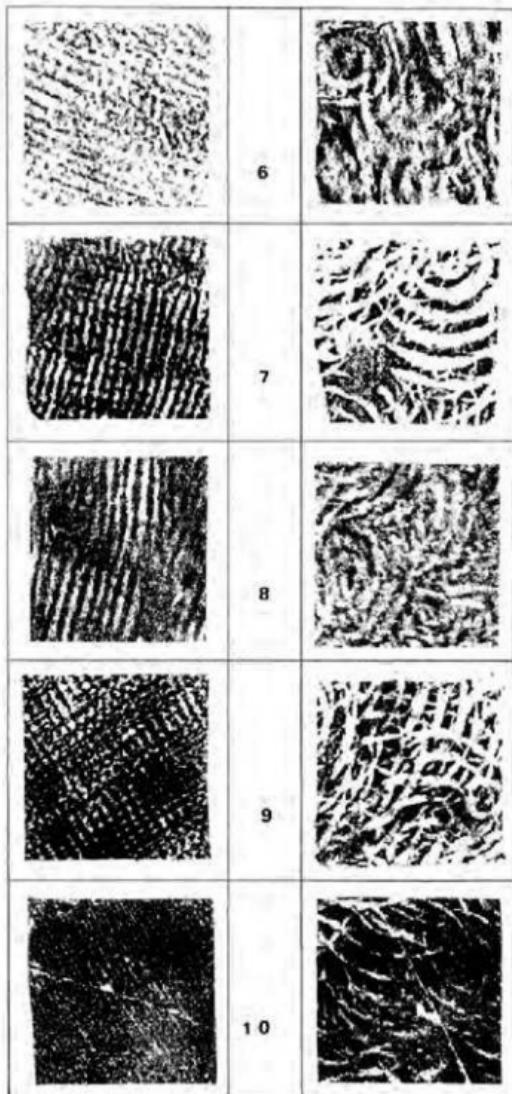
内面は自然釉がかかり光沢がある。

(9)は外面を斜格子叩き、内面は円弧叩きである。

大型土器の破片は、調査地東限の溝状遺構最深部からまとまって出土するが、溝状遺構は溝地に縁き、遺物も接続する。

廃棄溝的性格が強く、多量の遺物が埋蔵される可能性はさわめて高い。

(124・125)の土師器高杯はこの地点からの出土である。



第37図 大型須恵器叩き痕 (2)

V. むすび

1. 七反畠遺跡の概観

調査を終えてまる2年を経過したが、出土遺物の量は龐大で、遺物の整理分析はまだじゅうぶんに進んでいない。ここに取りあげたのはその一部で、内容も概報にすぎない。

今回の調査を行なうまで、大野原に広がる遺跡丘陵は、埋葬遺構を主体とする弥生時代の遺跡と見られてきた。事実何回かの調査によって、若干前後の遺物の複合は認められたものの、その見方自体に異説はなかった。

まえにも述べたが、調査地である七反畠遺跡は、大野原遺跡範囲の上限にあり、30cm台地の下限に当るが、この台地は未調査区域でもあった。調査はブル建設に伴なう範囲確認であり、限定された区域の調査であって、遺跡内容の一端を覗いたに過ぎない。しかし今回の調査は、今後この地域での古代史研究に重要な資料提供を果すことになる。

縄文時代後期の御領文化に続き、近接する景華園、一野の墓やかな弥生文化盛行後、古墳文化が衰退し、律令時代の古代文化は、記紀・風土記の説話と裏腹に空白時代をこの地では迎えていたからである。

調査過程で見学に訪れた諫早市文化課の秀島貞康氏は、遺構、遺物を観察し、古代集落址の可能性と官道、駅家とのかかわりを示唆されたが、たしかにその予見をうなずかせる内容を伴なう遺跡である。

出土遺構の特徴を示すものは、柱穴を伴なう住居址の痕跡と、大量に遺物が投棄された廐棄場である。遺物は土師器、須恵器で占められるが、その量と質は堀下内斜部では出土事例がない。

これらの廐棄遺物は、その前提となる古代集落、地方官署等の存在と決して無縁とはいえない。今後の地方史研究の課題ともなる。

2. 時代区分と編年

出土遺物の層位はⅢ層であるが、Ⅳ層、Ⅴ層をくり抜いた遺構内にも集中出土を見た。

須恵器、土師器の出土比率は土師器が勝るが、器種の多様性は須恵器である。年代については、小田富士雄氏の「九州須恵器編年図表」、中村浩氏の「畿内の須恵器編年図表」（註1）。に比定し、須恵器を中心に考察したが、小田編年で第6期に僅か杯蓋がはじり、他は7期に編年される。7世紀後半から8世紀にかかると思われる。中村編年では、Ⅲ期に一部、Ⅳ期に須恵器のはとんどが含まれる。年代についてはほぼ同じである。7世紀にかかる須恵器は、A括弧区出土の長いかえりを持つ蓋杯（第17図10）、

高杯（第17図11・12）である。いずれもA4拡張からの出土で、B4拡張区からはこの時期のものは杯蓋1点（第19図・12）がある。

土師器については、甕の出土が圧倒的に多く、榦、皿がそれに続き、蓋、高杯が若干まじる。西弘海氏の「西日本の土師器編年図表」に比定すると、須恵器編年に共伴遺物として対応する。高杯二点が出土したが形状は須恵器高杯に共通し、IV期前半に比定できよう。

以上のことから、遺跡は、若干7世紀の遺物の混入を見るが、總じて、8世紀、奈良時代の遺跡と時代区分することが可能であろう。

3. 遺跡の規模と広がり

七反畠遺跡に南接して、一丁畠遺跡がある。この遺跡地の多くは遺跡台帳に入っていない。牛蒡畠で占めるが収穫時には遺物がよく地上に掘り出される。須恵器、土師片が畦道などに多量捨てられ採集できる。道路工事で甚大な量の土器が出土したと伝えられる地域もある。

一丁畠、七反畠などの字地名は条理制とのかかわりが指摘されるが、遺物の散布状況、地形から見て、同一遺跡範囲とみなしてよい。むしろ一丁畠道に集落が広がり、七反畠遺跡はその端部ととらえてもよい。

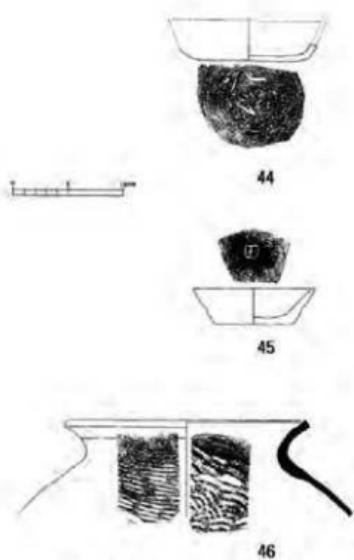
（第38図）は、一丁畠採集の土器である。

（註2）（44・45）は土師器で、それぞれへ書き文字がある。（44）は八、（45）は田と書かれている。

（45）は須恵器甕である。いずれも七反畠遺跡の土器と同時期のものである。古田正隆氏の採集遺物にも、同時期の須恵器、土師器が多くあり有明町歴史資料館に保存されている。

古田氏は、有明町郷土史で、「一丁畠遺跡は、旧甘木遺跡のこと、その範囲は広く、北は大野原遺跡につらなり、南は甘木の上部まで続く、この遺跡の特徴的なことは一様に鐵鋤の散布みることである。土器は瓶型土器の散布が多く、その他須恵器、瓦器などの類が多い。」とのべている。

今後の遺跡保存策が強く求められる地域である。



第38図 一丁畠採集土器実測図

4. 廃棄壙と祭祀

七反畳遺跡を構成する主要遺構は廃棄壙である。「遺構」ならびに「遺物と出土状況」の項でも述べたが、壙は径、深さともに1m余の楕円状に掘られたもので、壙内からは、2千点を超える龐大な量の遺物が出土した。その遺物の堆積層の間には随所に炭化物が検出され、火を焚いた痕跡を残していた。また壙の周縁部には、柱穴が配置され、壙を覆う東屋風の建造物の跡をうかがわせた。柱穴が錯綜するのは建替え跡と思われる。柱穴内からも遺物は検出された。

廃棄壙、土器溜めなど、遺物の集中投棄遺構については、しばしば祭祀とのかかわりが論じられている。この遺構もその性格を濃厚に感じさせるものである。それは弥生、古墳期の、祭神に捧げた器を、破碎して投棄する土器溜め的性格のものではなく、使用した日用品、とりわけ食器類の破損品を送葬的性格をもって廃棄する。その行事の跡をうかがわせるものである。要するに廃棄に伴なう祭事である。

廃棄壙が単なる廃棄場であるとすれば、貝塚的性格で用は足りる。立地条件から見ても、遺跡の東方は急傾斜地で、その崖下は境の松川が峡谷をつくって流れ、不用品の投棄場所に最適でもある。

特定場所を定め、特定の施設を設け、そこに一括廃棄物の処理をする以上、当然その理由が存在すると判断すべきである。その理由は廃棄行事でありそれに伴なう祭祀行為と見なしてもおかしくない。類似する民俗的な慣習は今でも諸行事に見られる。「供養」とよばれる祭祀行為である。



廃棄壙遺構（南から撮影）

遺構は、土器編年から、8世紀、奈良時代を中心に前後にかかる時期のものである。この時期には、須恵器生産が普及し、九州でも北部九州を中心に須恵器が急増している。しかし須恵器の生産が向上したとはいえない、一般民衆に普及したわけではない。

補文、弥生土器に比べ、この時代の土器出土事例はむしろ減少する。

土師器をふくめ、食器や、生活用具類は貴重な必需品で、

消耗品的性格は薄い時代と判断すべきである。山上憶良の「貧窮問答歌」に反映された生活実態をこの遺構に重ね合せるとき、生活用具の「廃棄」に対する心情を「供養」の形に現わしたと見てもおかしくはない。

丁寧に擴を開け、東屋風の壁のない獨立小屋を設け、歳時をもって廃棄の祭祀を行ない、壇に破損器物を投入する。火を焚き神域として淨め、魚貝類を供物とし一諸に葬る。このように廃棄遺構を見ることはうがった見方であろうか。

廃棄遺構の正面の上層周縁部に人頭状の粘土塊が据えられるが造形したものである。祭祀にかかわるものとも思われる。(グラビア6)

5. 炉状遺構

B4拡張区の東端部に出土した炉社状の遺構は不可解である。鳥状を示し、周溝をめぐらす形をとる。鳥の北端に人頭信程の石を三個配置し、周辺部約1mの範囲に火を焚いた痕跡を強く残す。溝は排水のため掘られたとも考えられるが、炉状遺構は孤立した火焚場所であろうか。廃棄場との関係も想定されるが不明である。周溝部分にも遺物の投棄が見られた。火焚きは祭祀にかかわる聖域化の行為ともいわれる。今後の事例に期待したい。

註1. 世界陶磁全集2、日本古代、小学館による

註2. 島原新聞社記者、宮本次人氏の採集である。



発掘調査に参加された方々

図 版



調査地



調査風景 島高郷土部の協力



調査風景

写真図版 1 調査風景



A 拡張区の出土状況



B 拡張区の出土状況



B4 トレンチ 須恵器壺の出土状況



遺物の実測



刀子の出土状況 B 拡張区

麻糸壺の上層部

写真図版 3

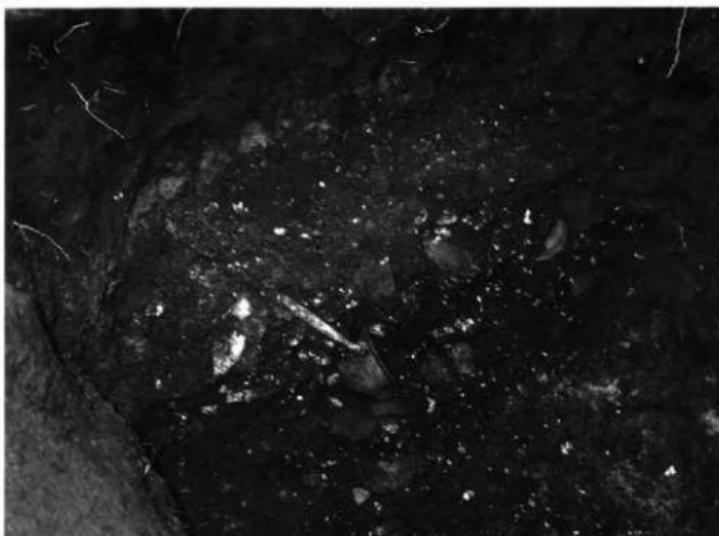


廃城中層部の出土状況

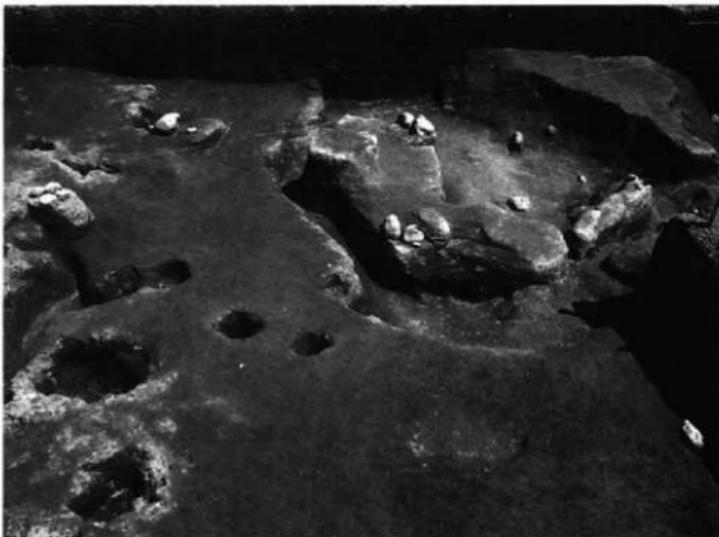


炉状遺構上層の出土状況

写真図版 4

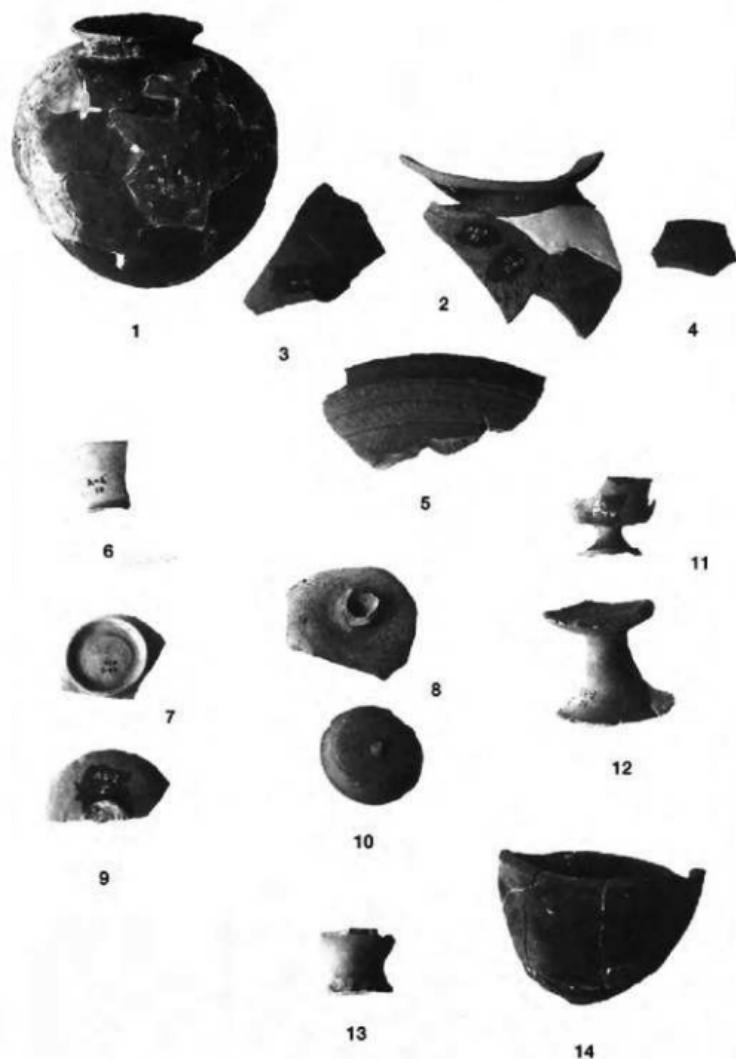


廃棄場中層部の出土状況



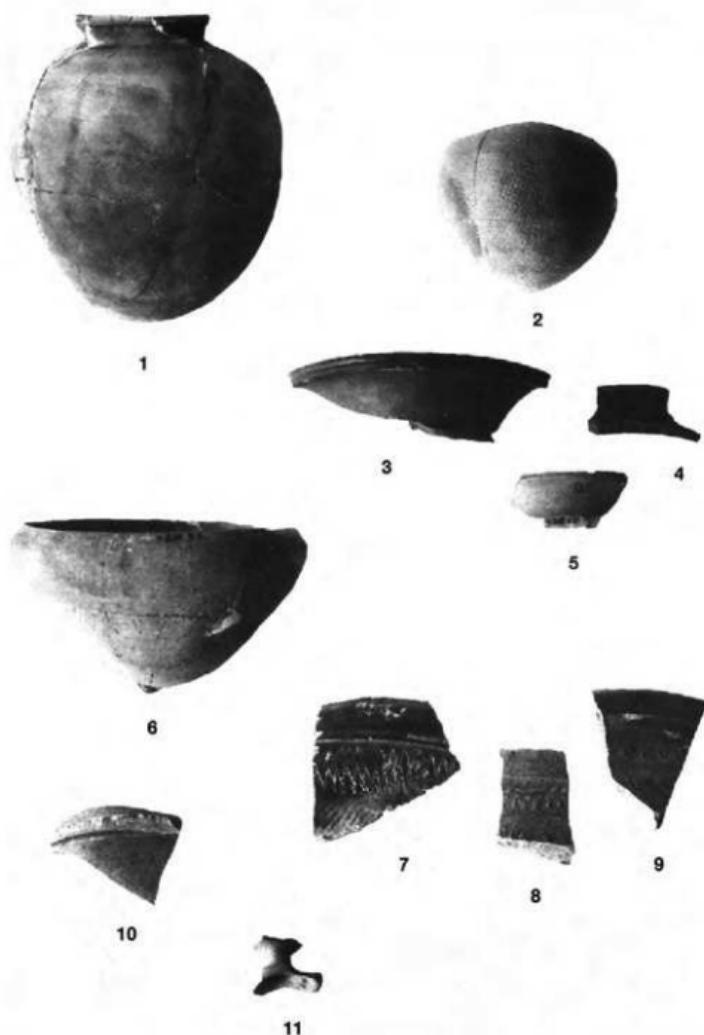
周溝をめぐらす炉状遺構

写真図版 5



A 拖张区出土遗物

写真图版 6



B 拓張区出土須惠器甌・鉢

写真圖版 7



12

13

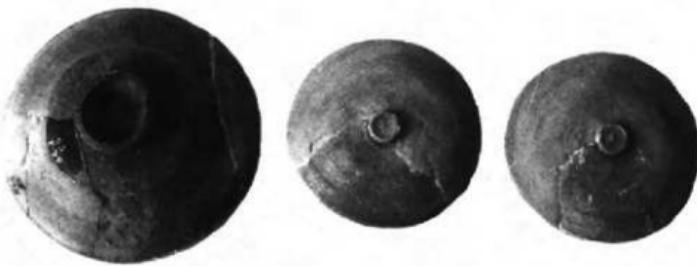
14



15

16

17



18

19

20

B 拱張区出土須恵器杯蓋 (1)

写真図版 8



21



22



23



24



25

B 括弧区出土須恵器 杯蓋(2)

写真図版 9



26



27



28



29



30



31



32



33



34

B 挖掘区出土須恵器 杯蓋(3)

写真図版 10



38



36



37



35



39



40



41

42



45

43



46



44

B 括張区出土須恵器杯蓋 (1)

写真図版 11



47

48
49

50



51



52



53



54



55

B 拾張区出土須恵器 杯 (2)

写真図版 12



56



57



58



59



60



61



62



63

B 拱腰区出土须唇器 杯 (3)

写真图版 13



64



65



66



67



68



69

70



71



72



73

B 拱張区出土須恵器 杯 (4)

写真図版 14



74



75



76



77



78



79

B 拡張区出土須恵器 Ⅲ

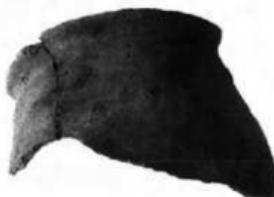
写真図版 15



80



81



83



82



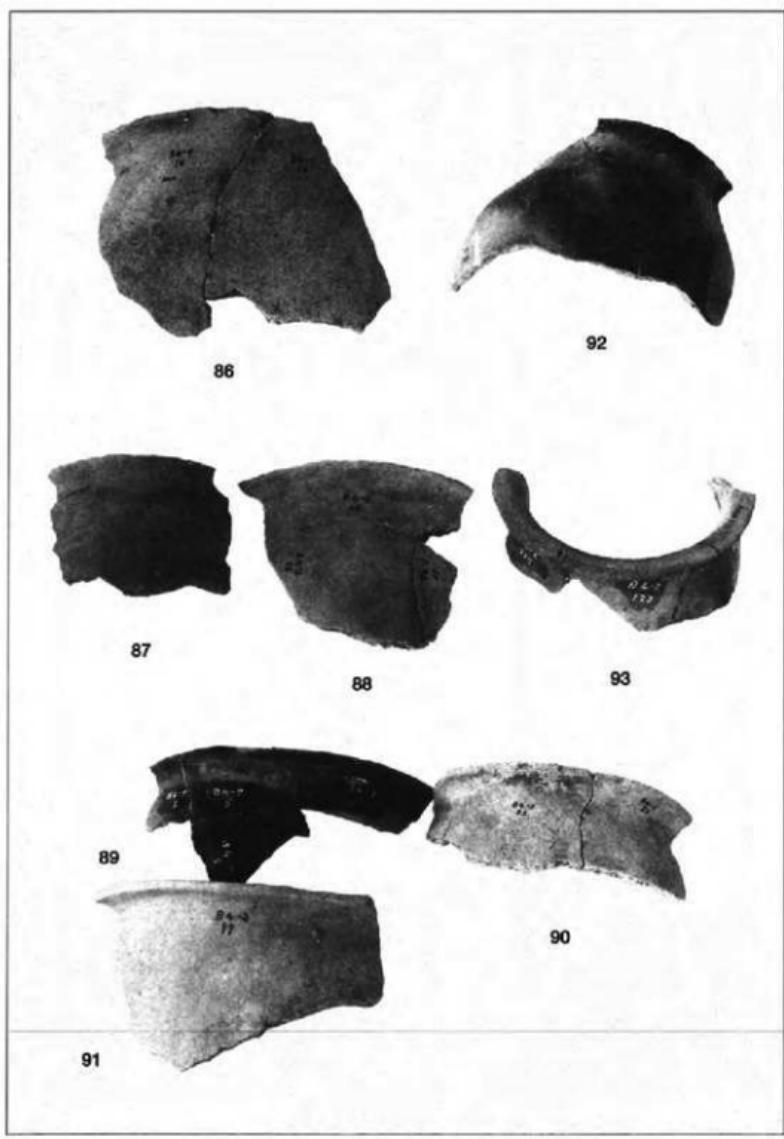
85



84

B 括張区出土須恵器 皿・土師器 壺 (1)

写真図版 16



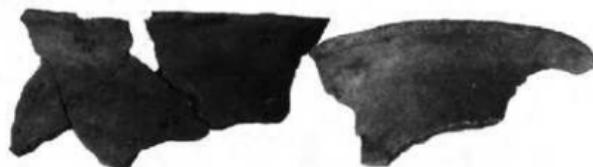
B 括弧区出土土器 瓢 (2)
写真図版 17



94

95

105



96

97



98

99

103



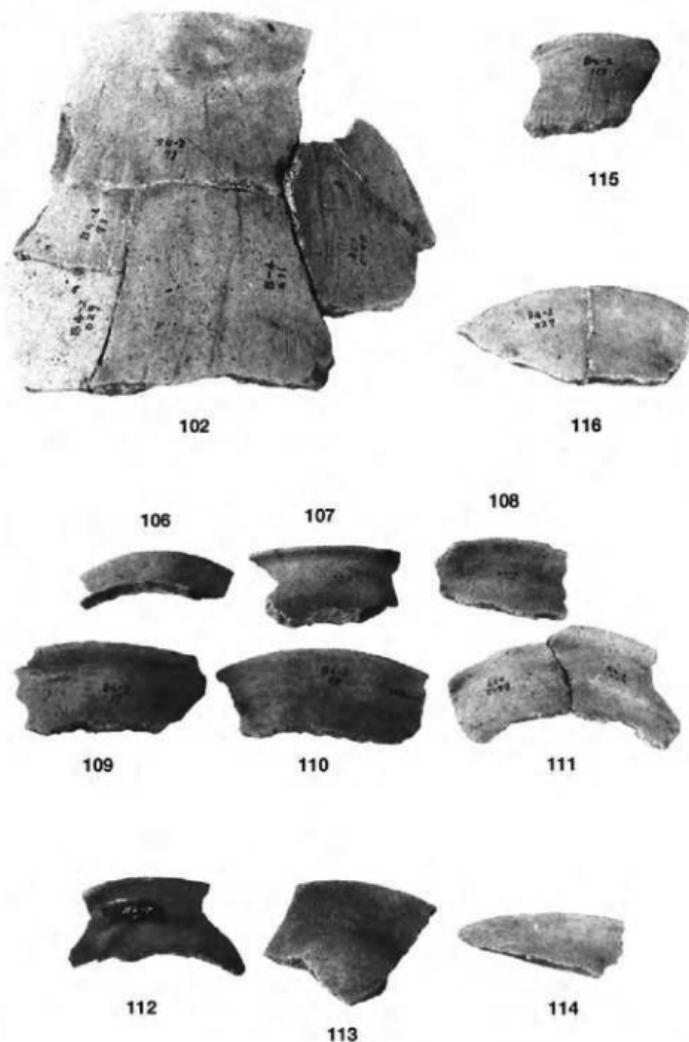
100

101

104

B 拡張区出土土器 瓢 (3)

写真図版 18



B 括張区出土土篩器 麽 (4)

写真図版 19

117



118



119



120



121



123



122



B 拾張区出土土篩器 瓢・瓶型土器

写真圖版 20



124



125



126



127



128



130



131



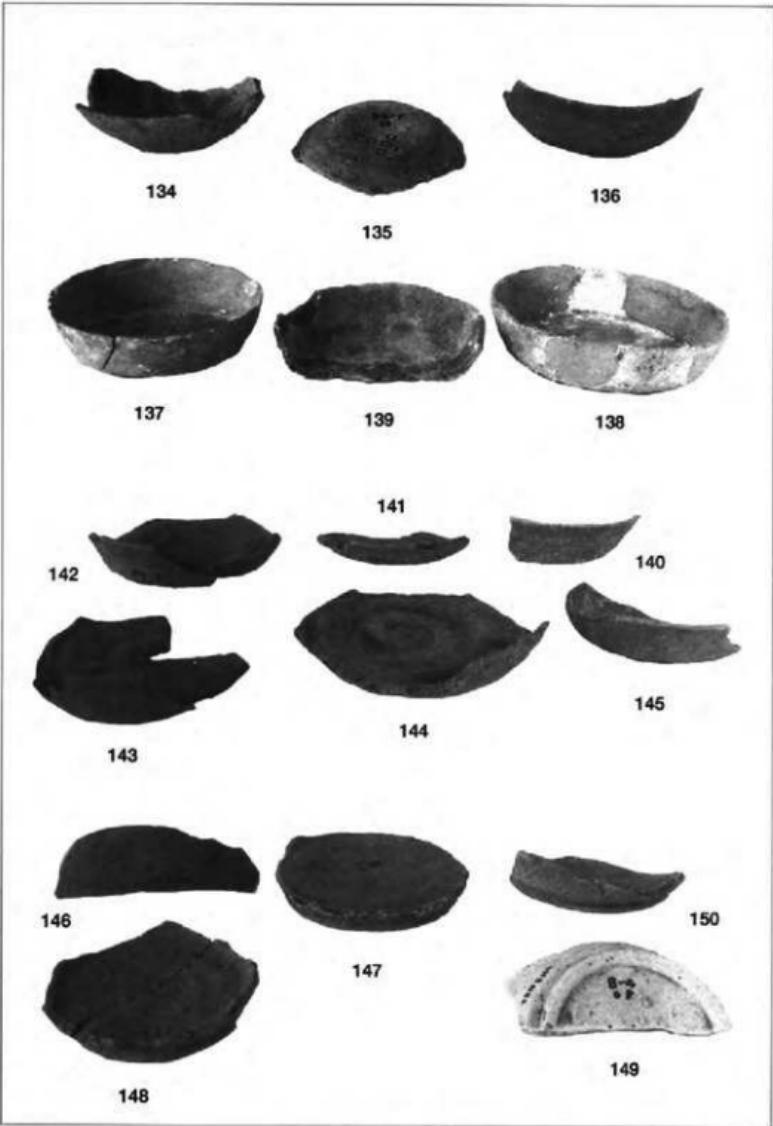
129



132

B 拓張区出土土師器 高杯 他

写真図版 21



B 挖掘区出土土器 梭

写真图版 22



151



152



153



154



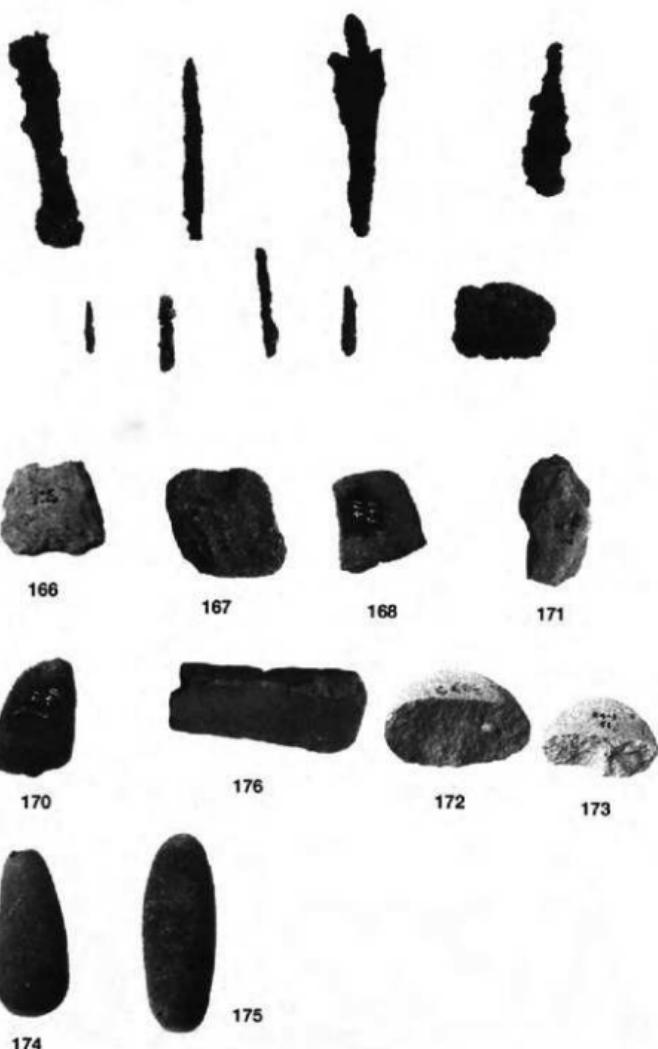
155



156

B 振張区出土 土師器 皿 他

写真圖版 23



B 括張区出土鐵器・鐵鎌・石器

写真図版 24



鹿塚出土鹿骨(上段) 出土遺物・近代陶磁(下段)

写真図版 25

有明町文化財報告書第10集

概要報告書

大野原七反畳遺跡

1993年5月

発行所 有明町教育委員会

住 所 長崎県南高来郡有明町大三東戊1438-1

印刷所 康真堂印刷

長崎県大村市原町467-12

